

万象 平成十四年十一月十三日第三種郵便物認可  
令和七年十月一日発行（毎月一回一日発行）  
第二十四卷 第七号（通卷二八三号）

# 万象

B A N S Y O

十月号

2025.10



十月の句

露の旅なかの二日は海をみて

長谷川 双魚

地球上の生命は40億年ほど前に原始の海で誕生したと考えられている。それで降海は生命の源としてあらゆる生物の母体の役割を果たしてきた。時々海を見なくなるのは命の源の前で自分と向き合うためなのかもしれない。

露は東の間草木に光を積もらせ清々しい光景を生む。しかし日差しとともに消えてしまうことから儂いものの譬えとして詠まれる。触れるほどの距離の儂い露と、命の源として絶えず躍動する海が水という接点で呼応している。「露の旅」とは儂い一生を意味するのだろうか。 (句集「風形」所収)

(杉澤 修)

令和七年

十月号

# 万象

BANSYO

銀の滴降る降るまわりに、  
金の滴降る降るまわりに

— 知里幸恵『アイヌ神謡集』より

梟の神の自ら歌った謡—

# 万 象

令和7年10月号

主宰作品 広島忌 …………… 江見悦子 4

万象の窓<sup>④</sup> 「省略」について 1 …………… 江見悦子 5

名誉顧問作品 花 火 …………… 小林愛子 6

## 風音集

中村 千久・福島せいぎ・柳澤 宗正・中條 睦子  
松原智津子・亀田やす子・沢辺たけし・吉中 愛子  
榎本 文代・神田美穂子・井村 和子・前田貴美子

風音散歩<sup>③⑤</sup> (十月号) …………… 小林愛子 10

## 同人作品

江見悦子選 …………… 11

同人作品の佳句 …………… 江見悦子選 31

## 同人会だより

「万象」オンライン同人会の参加者募集 …… 小池 清晴 32  
8月の「万象」オンライン同人会高点句

珈琲ぶれいく<sup>⑥⑤</sup> …………… 33

佳句佳句しかじか 同人作品鑑賞(八月号) …… 神田美穂子 34

## 同人特別作品

新田の荘 …… 大木 茂 36

梅 雨 …… 桑原優美子 37

特別作品評(八月号) …………… 荻野加壽子 38

第二十三回万象俳句賞発表

万象俳句賞 受賞作品 尾を高く

次 点 一日の春野

佳 作 京ことば

選評・得点表

応募作品抄 (江見悦子選)

続・風のしをり<sup>㉔</sup> 子規と私 (九) 細見綾子

万葉の抒情<sup>㉕</sup> 『万葉集』にたずねる抒情の源流<sup>㉖</sup>

万象ノオト「ジャム」

北から南から 辺戸岬・みやらび句碑 (沖繩)

万象作品

江見悦子選

私のこの一句 ..... 大木 茂・織田みさゑ・佐藤 哲・今越みち子

万象作品の佳句 ..... 江見 悦子

新中央句会報 (7月例会) ..... 70

俳句カレンダー掲載句自註 眼帯のはづれし夫へむかご飯 (十月) ..... 江見 悦子

ルビーの小函 (十月号) ..... 編集部・校正担当

東西南北 ..... 74

穂莉 照子

辺野喜宝来

松永 博子

.....

.....

編 集 部

橋本 清

杉山 鈴子・山口 秀吉・田上 幸子

内田 郁代・長谷川洋子・奥澤よし江

稲嶺 有晃・宮城 勉

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

〔表紙イラスト〕永井もりいち

広島忌

江見悦子

(主宰)

赤松の風ゆるやかに籐寝椅子  
デューラーの犀や涼しき木版画  
赤子泣く声つんざけり冷房車  
縄文の石棺に触れ夏柳  
黒き背のはや遁走の御器かぶり  
粉ぐすり膝にこぼるる今朝の秋  
広島忌水甕に水あふれしめ

# 「省略」について 1

江見悦子

昨年の11月号から今年の3月号まで5回にわたって、「辞書と歳時記」「季語について1」「季語について2」「切れについて1」「切れについて2」と、俳句の約束事や俳句表現の基本についてまとめました。今回は「省略」について考えます。

令和4年4月号から「万象」誌で始めた「風のしをり」で、沢木欣一先生著「俳句の基本」の記事を6回にわたって紹介しましたが、その中にこんな文言があります。

・作品には省略と凝縮が望まれる。普通の散文より言葉の密度が濃くあらねばならないとされる。  
(5月号)

・俳句の実作で苦勞することの一つは単純化ということである。俳句の詩型は短く、しかも定型であるから散文のように細かい説明が出来ない。(7月号)

ここで沢木先生が仰っている「凝縮」「単純化」という言葉は、「省略」を補う意味で使われていると思います。

俳句は五七五、十七音の短い詩です。この短さの中で自分が感動した一つの世界を詠もうとするのですから、感動したモノに焦点を絞り、余計な言葉を捨てることが肝要です。「省略」は先ず捨てることから始まります。これ以上は省くことが出来ないと、ころまで言葉を捨てて表現を凝縮し、十七音に仕立てた句は、しかしそれだけではまだ完成しません。読者がその句の余白に想像力を働かせて初めて、一句が成るのでしよう。

沢木先生が「俳句の基本」の「写生の佳句」の中で、単純化について触れている部分を紹介します。

紙倉と菖蒲うつして川濁る

野崎ゆり香

単純化の良く利いた写生句。雑多なものが雑然と並んでいるなから、きびしい選択を行わないと単純化ということは出来ない。カメラの目と俳句の目は当然違うもので、俳句の目には強い集約が要求される。

「単純化」「省略」について、次回もう少し考えを深めたいと思います。

花 火

小林 愛子

(名譽顧問)

のうぜん火花を垂らす石の塀  
袖口の汚れて梅雨に倦みたる  
夏草の茗荷畑を呑み込めり  
炎帝の叱責に草伸びゆくや  
ヘルペスある人のの悪さ納まり旱星  
かぶりつく音の楽しさ桃すもも  
鎮魂の菊の花火はしろがねに

長岡市復興記念

大西日 中村千久

(編集人)

白南風や差し潮染むる大千潟  
水音のからむ岸辺の茂りたる  
磁石置く折目破れし登山地図  
峰の影峰に映して雲の峰  
緑蔭のテラス恋人たちの手話  
絶海の俊寛の島大西日

遠花火 福島せいぎ

(顧問)

空襲の真つ赤な記憶熱帯夜  
初蟬の申し合はせたやうに鳴く  
百日紅妻の好みの色に咲く  
遠花火水音を聞き眠りけり  
水満たす四万六千日の墓  
また同じ国を旅して昼寝覚

蓮の実飛ぶ 柳澤宗正

(顧問)

つゆの明大棧橋に飛鳥Ⅲ  
卓上の小蟻潰して臍を噛む  
散髪の頭すつきり今朝の秋  
終戦後八十年の蟬時雨  
背負い来し先祖をそつと魂棚へ  
元禄の首欠け地蔵蓮の実飛ぶ

涼新た 中條睦子

(同人会会長)

日盛を来る眼や本の森  
夏休み天井までの書架の中  
遺言は延命無用大夕焼  
青菘を揺らし常世の風かとも  
境内の闇引き連れて蚊喰鳥  
涼新たな椅子深深と書を開く

合歡の花

松原智津子

(北海道)

朝まだき何時目覚めるの合歡の花

炎昼を凌ぐ手立ての映画館

眠れぬ夜臥所の窓の月涼し

糠床に粗塩を足す今朝の秋

昨夜の荒れまだ青臭き落ち胡桃

青 棗

亀田やす子

(栃木)

コンビニに隣るひまはり畠かな

白鷺の飛ぶ残照のうするの中

原爆の日や生ぬるき化粧水

夜ごと出づ玻璃の守宮にこんばんは

枝先の棘のまつさを青棗

十字架

沢辺たけし

(千葉)

十葉の花十字架の影に現れ

小さき翹ほたるぶくろへのがれたり

庭土のかすかな湿り秋暑し

葉洩れ日にひぐらしのこゑゆれにけり

秋雨にふなあし変ふる沼漁師

初 秋

吉中愛子

(東京)

詰め合うて人ら四角に夏座敷

殻割つて尽きたる蟬のうすみどり

枕辺に詩集伏せあり昼寢覚

初秋の杜に補聴器はづしけり

捨て皿をまとめて拭ふ今朝の秋

酷暑 榎本文代 (神奈川)

酷暑かな硝子に映る背の曲り  
くろぐろと青田の中の能登瓦  
館涼し蝶浮く鏡花の硯箱  
てつぺんの金粉くづしかき氷  
古着屋に売られてゐたり甲虫

かき氷 神田美穂子 (静岡)

のうぜんの火の色闇に納まらず  
登山靴脱ぎて足湯に指放つ  
老いてなほ寄り道楽しかき氷  
暑に耐ふる熱き焙じ茶あさな  
やまかがし沼に光の帯流す

夕月夜 井村和子 (石川)

土用太郎次郎三郎雨連れて  
アルバムに師のこゑ恋ふる夕月夜  
サングラス雷門に落ち合へり  
三つ編みの少女も混ざる盆踊  
蚊の姥のかそけき声も夕厨

指鉄砲 前田貴美子 (沖縄)

夕風愛子句集「くれのおも」を栞りて涼し『くれのおも』  
花石榴指鉄砲の熱発す  
点滴の遅速へ遠き夏の海  
風容れて涼しき一樹那覇暮色  
街は夜を深めて薔薇はくれなるに

# 風音散歩 ㊦ (十月号) 小林愛子

初蟬の申し合はせたやうに鳴く 福島せいぎ

初蟬には胸がどきりとする。鳴き声が外国人には雑音に聞こえるそうだが、日本人にとっては琴線に触れる音である。

「初蟬」は当人にとつて初めての蟬、おどろいて足を伸ばすと、あちこちに鳴いているではないか。それが「申し合はせたやうに」であり、季節の移り変わりに感慨を催している。〈順番をわきまへて鳴く山の蟬 甲子雄〉こちらは蟬の種類の出現の順を表わした。掲句は同種類の蟬の声であろう。

小さき翅ほたるぶくろへのがれたり 沢辺たけし

螢袋の花は6・7月ごろで、淡紅紫色、または白色に、濃色の斑点がある。鐘状の花に螢を入れて遊んだことからこの名があり、いかに生活と密着し愛されてきたかが伺える。

掲句は「小さき翅」が慌ただしくやって来て「ほたるぶくろへのがれたり」と危機一髪避けることが出来た。敵は鳥か蟻螂か？ 昆虫の世界も大変、此度は頼もしい螢袋であった。

夜ごと出づ玻璃の守宮にこんばんは 亀田やす子

「守宮」は蜥蜴によく似たヤモリ科の爬虫類。夏の夜に出てきて昆虫類を食べる。指の裏に吸盤をもつ。

「夜ごと出づ」とはこの家のお馴染さん。そうそう守宮は家を守るので「家守」とも書く。硝子窓に花のような吸盤を広げ首を傾げるかわいい奴、こちらからこんばんは。

殻割つて尽きたる蟬のうすみどり 吉中愛子

蟬の幼虫は地中から出て、成虫になる。羽化したばかりは白っぽく翅も縮れているが、やがて蟬固有の色になる。

羽化は天敵の少ない夜を狙うことが多い。「殻割つて尽きたる蟬」とは羽化を果たして力尽きた蟬である。かつて冷夏の年に殻を出切らず死んだ蟬が多かった。今年は酷暑、蟬にも適温があるのだろう。美しい「うすみどり」が哀れを誘う。

登山靴脱ぎて足湯に指放つ 神田美穂子

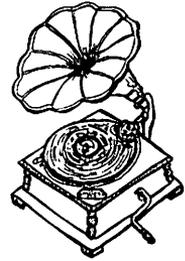
昔は、登山は信仰のために行われたが、現在ではスポーツ登山が主流である。シーズンになれば最寄りの駅に登山帽、登山靴、ビッケル等の近代装備の人をよく見かける。

自分の登山靴には愛着があるが、下山後の足湯に指を広げるのはまた格別。達成感あつてこそその解放感である。

蚊の姥のかそけき声も夕厨 井村和子

秋の蚊は歳時記によると、一つは戸外に盛んに発生し刺される痛む蚊の仲間、もう一つは哀れな翅音を立てて飛ぶ家の中の蚊(アカイエカ)と、二通りの使い方があるという。夕厨に纏いつく弱弱い蚊、「蚊の姥」が言い得ている。むしろ溢蚊に近い。作者は疎むよりは親しみを感じている風だ。

# 同人作品



江見悦子選

札幌 岡本敬子

緑蔭や白きマリアの稚くて  
うなさかへ向かふ夏蝶見送れり  
水底の砂動かして泉湧く  
芍薬の意思あるやうなふくよかさ  
日の暮れてなほしろじろと花うつぎ

札幌 林陽子

火の山の雨に烟れる花葵  
新茶汲む仏間の父と母若し  
遠花火よりも遠くに父と母  
右肩に触れて茅の輪のほひたつ  
黒日傘重なり合へる交差点

札幌 落合裕子

仏にと花切りをれば夏の蝶  
誘引の竹竿登る蟻の列  
水遣りの頭に絡む蜘蛛の糸  
反抗は時には力薔薇の棘  
前髪の重たき程の暑さかな

札幌 濱谷和代

開拓の大樹揺さぶる青嵐

残照の朱失はず夏至の空  
胡瓜苗に水をたつぶり朝なさな  
燭台の明かりのゆらぎ薔薇の風  
時を打つ音の鈍さの大暑かな

札幌 大内 和 窓

トーチカをなぶる荒波沖繩忌  
一人ゐて二人目見えぬ小麦畑  
診療の合間の氷菓したたれる  
軒に干す魚みな振れ夏旺ん  
往診の蹠にほてり大暑の日

札幌 大内 マキ子

熊出るぞと赤の看板青嵐  
馬の背に触れて命の涼しけれ  
岩肌に日のあかあかと滝しぶき  
牛臭き一本道や雲の峰  
老漁夫の声とどかざる夏の沖

札幌 中鉢 弘 一

夏旺ん大河のうねり河口まで  
一木を弄びをり夏の波  
出入りなき寺の敷石苔茂る

猛暑日やこの地に長き冬あるも  
今日咲きし朝顔今日をたたみをり

札幌 北 浦 詩 子

東の間の街のやはらぎ夕焼雲  
ひと鳴きに水に潜れる鴨涼し  
駆け込みし地下鉄に聞く江戸風鈴  
神木のさやぎに祝詞夏祓  
橋桁に届く中州の茂りかな

江別 佐 藤 哲

玫瑰や夕日呑み込むオホーツク  
花菖蒲の香りただよふ寺のまち  
生垣にひとつ残れる花南瓜  
血縁の顔の揃ひてメロン切る  
太陽の香のつまりたるトマトもぐ

江別 太 田 佳 美

青葉閣樺の走り根灰白し  
夏蓬身の丈越ゆる原始林  
帰宅時の紺の麻服座りじわ  
命日に妣の仕立てし黄の上布  
鉄線花自在な蔓は宙に浮き

新潟 高橋 ひろ

皮脱いで鉛筆ほどの竹の青  
この辺りまだ干割れなし炎暑の田  
猫とねむる夜の冷房はゆるやかに  
太刀ほどの胡瓜もらひはしたけれど  
空梅雨のまま梅雨明けてしまひけり

新潟 高野 松風

隠沼に浮きを立てたる梅雨晴間  
枝下す隣の枝へ昼餉吊り  
人影にまた亀の子の潜りけり  
夏蝶の身ほとりひらり掠めけり  
息かけて拭ふ眼鏡や額の花

益子 光岡 れい子

炎天に撫牛の瞳のとろけさう  
あめんぼう古池の面踏みしめて  
縁に座すひとりの句座や半夏生  
境内の百の饒舌江戸風鈴  
風鈴の音踊り出す朝戸風

芳賀 大村 かし子

肥料にと根本に集め柿の花

境内の紫陽花巡る押し車  
てらてらの神牛撫でて酷暑かな  
青柿の舗装を弾きをちこちに  
梅干して客と二人の味見かな

宇都宮 阿久津 勝利

もろこしの千本無人販売所  
蒼天や青き音して実梅落ち  
御手洗に浮かす紫陽花赤青黄  
八十路への茅の輪を潜る誕生日  
千段を一段一步かたつむり

栃木 上岡 佳子

夏椿朝夕に掃くさ庭かな  
蘆原に豹紋蝶の沈みけり  
緑蔭のとうとう空かぬランチ席  
今年竹に止まる鴉も揺れてをり  
七夕竹遊覧船の乗場にも

佐野 増田 幸子

くひ違ひ虎口朝の風涼し  
梅天へ奉讃の巫女声透る  
梅雨の雷一つ轟きそれつきり

唐澤山三句

瑠璃色や一瞬ひかる糸蜻蛉  
まばたきに燈心蜻蛉見失ふ

佐野 加藤 季代

白雲の端を掴んで凌霄花  
片仮名は漢字の欠片カンナ咲く  
大いなる影を沈めて夏の鯉  
滝しぶき皆よき顔を向けるたり  
花栗にしばらく空をゆずりけり

佐野 阿部 澄

三鬮嶺の雲脚疾し戻り梅雨  
凌霄の蒼つつつく朝雀  
身ほとりの音を掻き消す夕立かな  
炎天へ半歩踏み出す親鸞像  
川音や瑠璃ひとすぢの糸とんぼ

佐野 芝宮留美子

赤多き雛罌粟の原遠筑波  
日に映ゆる江戸紫の花菖蒲  
釣糸の未だ三寸浦島草  
瀧落つる岩肌の層あらはなり  
花茗荷八嶋の杜の夕間暮れ

佐野 島田 和枝

野茨や人を通さぬ径となり  
雀来る雷雨の去りし水溜り  
山裾にひびく沢音合歡の花  
天狗岩蛇の髭の花地に触れて  
凌霄の散り放題や石畳

佐野 売野 緑

風を待つ坂の途中の振り花  
参道の混み合ふ蕎麦屋合歡の花  
新盆や師の短冊を飾りたる  
雷激し部屋中猫の駆け廻る  
大雷雨古刹の大樹根刮ぎに

佐野 店網 洋子

朝焼や流れの響く用水路  
植田道遊行柳の揺れてをり  
夏柳指に詠みたる芭蕉句碑  
夕涼し宿のロビーに琴奏で  
美ヶ原薄雪草のしづくして

足利 大木 茂

逆しまに鮎を焦がせり峠茶屋

巖滑る末広がりの四度の瀧  
山百合に風少し湧く裏筑波  
沼渡る蛇ひと筋の水脈残し  
利根川の水引く県都夏柳

土浦 澤 照 枝

小高きに一里塚ありねぶの花  
凌霄の吹き溢れ辻塞ぎをり  
夕顔や歩き疲れて浦の宿  
遊歩道沿ひの茶処誘蛾灯  
浦へ灯のこぼるる宿や浜万年青

加須 茂 木 弘 子

花茗荷に沈む八嶋の力石  
片白草ときたま鯉の隠れ場に  
薄日差す京むらさきの紫陽花へ  
川音の奥は八溝や鮎の宿  
梅鉢の玻璃戸の涼し天満宮

さいま 山 本 右 近

街薄暑路地に手機の音軋み  
パスワード忘れてまどふ梅雨ごもり  
三伏の風に威を張る鬼瓦

ドアマンのシルクハットや巴里祭  
水打つてはや宵めきぬ祇園茶屋

所沢 三好かほる

九輪草山の冷気をまとひけり  
落し文拾ふ沼への下り坂  
オルゴールの蝶子を巻きをり夏館  
晩夏光大棧橋にギリシア船  
杏子ジャム煮つむ匂ひの朝厨

所沢 南 雲 秀 子

高原のテラスにかじる焼もろこし  
竜の口より滝落つる楽しさよ  
弁天の朱の橋くぐる塩とんぼ  
弁天島めぐれば香る花縮砂  
サックスの生演奏や施餓鬼寺

千葉 田 中 道 江

電線に濁音で鳴く梅雨鴉  
栃の花晴れては曇る尾根の道  
月下美人闇の無音へひらきそむ  
花菖蒲の色あふれたる水路かな  
朝顔の蔓さぐりたる雨の空

千葉 松浦 陵 保

鎗矢の風切る音の涼しさよ  
仰向けの蟬草叢へ拾ひ上げ  
乳搾る蔵王の青嶺眺めつつ  
今日一日良き日とならむ朝の虹  
尾根道に雷鳥ふつと現はるる

千葉 喜多恭 仁子

青蛙 夫の忌日の墓の前  
半夏生「停戦合意」の虚しさに  
鰻食ぶ一人暮らしも十年に  
アイスクリーム祖母の口ぐせアイスクリン  
短冊に「平和」の二文字星祭

千葉 大月 玲子

あご飛んで放物線の光り合ふ  
夕立雲銀座通りに昼の闇  
素麺や縛ることなど無き暮し  
冷素麺厨に残るほてりかな  
決心のそのうちゆるるぶ氷水

酒々井 竹澤 竹里

千手ヶ浜王冠をなす九輪草

保津峡に蟬の鳴き声木霊する  
船宿の裏は南瓜の花盛り  
砂を這ひ土手を上れる南瓜蔓  
月鉾へ兎が跳ねてこんちきちん  
佐倉 大内佐 奈枝

風入や転がし延ぶる絵巻物  
磨かれし墓石売らるる炎天下  
首出して貫頭衣めくサンドレス  
明るさの残る夕餉や花木權  
さぼてんの一夜花てふ刺の中

佐倉 三屋 英俊

不意撃の機銃掃射や大夕立  
鳩居堂出で柿渋の絹日傘  
夕涼み風に鎮守の遠灘子  
涙拭くところを蛇に見られけり  
琉金の焰ゆらめく我鬼忌かな

佐倉 横川 良子

夏草が隠す売地の立看板  
夏の雲少年競ふ力瘤  
廃業の質屋更地に昼の月

水底に夏雲映し釣瓶井戸  
四人の子育てし胸乳夏旺ん

四街道 奥 太 雅

みどり濃き田の面に白し梅雨の蝶  
新じやがのつるりと剝けて玉の肌  
青柿の競り合ふ枝の撓りかな  
砂山に忘れバケツと水鉄砲  
南瓜の葉叩きたばしる大夕立

四街道 塗 木 翠 雲

九十九里風に吹かるる浜万年青  
不発弾処理に汗かく漠かな  
片蔭に声かけて押す車椅子  
水打つやすぐに乾ける石畳  
下総と常陸を繋ぐ虹の橋

船橋 山 下 良 江

雨音を弾き返せり朴青葉  
木から木へ雨粒つなぐ蜘蛛の糸  
炎天に名もなき草の立ち上がる  
じっじつと二声残し蟬の庭  
白雲の千切れて長し夏の空

船橋 赤 堀 洋 子

明星を涼しと仰ぐ朝まだき  
スーパ―の壁に激突大天牛  
朝涼や鴉の尾羽拾ひたる  
台風の雲間に朝の金星よ  
朝焼や金星残る高々と

船橋 久 保 村 淑 子

蘆原に不協和音の行々子  
少しづつ色を遠へて大青田  
フルートの演奏夏のカフェテラス  
沼濁り片白草の白さかな  
青柿の転がる道を投票へ

船橋 片 桐 帆 一

青葉雨浴ぶる一步や懐古園  
生垣を昼顔ひらひら抽んづる  
紫陽花の花鏝色に灼けてをり  
小諸そばすすする眼前揚羽蝶  
老人の会話の弾む暑氣払  
七夕の竹さわさわと願ひ事

船橋 宮 本 加 津 代

かな文字を散らし涼しき墨書かな  
病得し吾に今年の石榴咲く  
新涼やコーヒー熱く濃く淹れむ  
梅雨明の兆しの雲の湧き出づる

船橋 中嶋 久 登

入道雲ぐんぐんと立つ地平線  
葉隠れの青柿丸く育ちたる  
日の上り湖の新緑鮮やかに  
鳶職や麦茶一気の喉仏  
夏祭大漁旗のひしめけり

柏 山本とく江

富士閉ざす雨の城址や杜鵑  
神官の声に駆け寄る鹿の子かな  
梅雨晴間ふいに混み合ふドッグラン  
病む夫の束の間の笑み虹立てり  
知らされて胸中揺るる螢の夜

柏 内田 郁 代

父の名もあると青い目沖繩忌  
鷗外忌良太師と今俳談中  
山百合の花食み尽くす猿の群

崖下を彩るものに著莪の花  
干梅の匂ひ夜風に濃くなれり

柏 古川 京 子

起き抜けの水一杯や牽牛花  
未だ眠る夏霧の街歩を試す  
竹林の洩れ日縞なす遠郭公  
さくらんぼ抓めばみんな幼な顔  
駅前の猛暑搔きませ選挙カー

流山 穂 莉 照 子

一途なる折り泰山木の花  
蘆原に声詰め込んで行々子  
水馬休めばすぐに流されて  
噴水に大樹の揺らぎありにけり  
フランベの炎を高くパリー祭  
夕虹へブレイキー外す車椅子

東京 名 和 政 代

フェンシングのマスク外せば日焼の子  
青葦や矢板に寄する波の音  
練供養菩薩の背に夕日かな  
轟音のバイクの曲る凌霄花

カーテンに棲む蜘蛛の糸銀の糸

東京 藤田裕子

夕風に椰の葉ずれや夏祓  
夏ざしき横座りして句会かな  
梅雨寒し曲れるおよび祖母に似て  
渡り切れぬ横断歩道炎暑かな  
熱帯夜めざまし二時で止まりをり

東京 島野ひさ

疎開地のラジオに聞きし終戦日  
昼顔の気ままにひらく工場跡  
黄のカンナ今日の仕事は参院選  
投票をすませ一息蟬の声  
投票をすませ鰻をスープパーで

東京 加賀葉子

浜木綿の裂けて真白や香を放ち  
螢の家霸王樹高く花開く  
溶岩の原に檜扇燃ゆる赤  
籐寝椅子足の先なる小さき富士  
白々とででむしの檜腐葉土に

東京 久留島規子

遠まはりして見送れり夏至の宵  
青竹の筒をすべつて水羊羹  
小走りにくぐる茅の輪の匂ひかな  
真夏日や朝一番の映画館  
パノラマの街見下ろして暑氣払

東京 下嶽孝一

断崖にあの日の波濤沖繩忌  
蓮咲くや戦火の絶えぬ水の星  
聴かれある内緒ばなしや葱坊主  
瓶の水一夜に干して百合ひらく  
祭足袋こはぜはづしてひと眠り

東京 草間三香子

早ばやと閉ざす山門青葉闇  
水面被ふ草の匂ひや螢の火  
亡き弟の乱れし文を曝したり  
鎌のあと混じる新じやが届きたる  
染物屋人の気配の麻暖籬

東京 岡村純子

朝顔の一番花の青深し

朝市の艶良き茄子や手に重き  
乱切りの胡瓜そのまま菌に染むる  
鳩の巢の水草の間を見え隠れ  
初めての音のやさしき江戸風鈴

東京 桑原優美子

生涯の写真を開始末月涼し  
打水や一見の客お断り  
三越の地下のうなぎ屋独り飯  
干してある子等の上履き夏休み  
羽目外す女四人のピアホール

東京 三村紀子

蓮の葉のざわめき止まぬ城の濠  
炎天やゆらゆら回る風向計  
白南風や灯台残る坂の上  
水浴びに鴉集まる大暑かな  
門灯に今宵も来り縞蜥蜴

東京 小池清晴

指先に土の湿りや草むしり  
凌霄花崩れかけたる築地堀  
透き通る深海の目や金目鯛

懐しき昭和のコップ瓶ビール  
透き通る絵柄と音色江戸風鈴

東京 一由久美子

あをあをと竹の若葉の写真経寺  
朝涼や絵馬につましきヒンディー語  
瓔珞の瑠璃玉くもる小暑かな  
短夜の闇の水辺に一夜花  
天文台の森におはぐるとんぼかな

武蔵野 砂地宏子

梅雨明の空広々と輝けり  
ぼつちやりの素足の並ぶ乳母車  
その中に切株を置き草茂る  
水ざぶと籠一杯のトマトかな  
水色の花の巡れる絵灯籠

立川 正田華子

包丁の研屋は女石涼し  
仏壇へ路地に広がる夏菊を  
一枚のさざ波尖る植田かな  
青田風幼なの匂ひしてゐたる  
大暑かな団地の草に鳩沈む

町田 広瀬 俊雄

この辺り桂郎在りき青蛙  
田水沸く谷戸の田んぼや空青し  
照り返す畑にはびこる十字花  
梅雨晴や阿夫利山頂天を突き  
吹き抜くる風の香りや青田中

町田 桔 梗 純

校庭の小さき池やひつじ草  
くちなしや主はいつも庭手入れ  
音たてて割れ目の走る西瓜かな  
高きより鳴き声変へて鳥の子  
『くれのおも』読み返したる夕涼し

日野 喜多尾 明子

夕空を白鷺の二羽脚揃へ  
蛇に会ひ身の内どこかするりとす  
台風圏回転椅子のきゆきゆと鳴り  
炎昼や道路掘る音ふと緩び  
遠き地の戦の止まず夜の雷  
雨の夜や使ひ残しのオーデコロン

横浜 西本 才子

売地埋む草みな萎む早梅雨  
梅雨明けて前山の雲消えにけり  
枝張つて池暗くせり栗の花  
木立高き社の列や夏祓  
新盆の友飾られて写真笑む

横浜 大橋 雅子

深夜テレビ見続けてをり熱帯夜  
七夕や女兒誕生の知らせ来る  
ガラス器に梶の葉浮かべ星祭  
坂道に一息入るる炙花  
予報地図の列島赤く今日大暑

横浜 山崎 郁子

をのこらも傘を手にする猛暑かな  
雲の峰能登を沸かせる大の里  
新緑や修学旅行のバスの窓  
若竹の節目浮き立つ青さかな  
落梅のほつたらかしや庭一面

横浜 田賀 棟 恵

放牧の牛散り散りや梅雨晴間

青空へ咲き上りたる立葵  
せせらぎに翡翠るりを濃くしたり  
白百合の青磁の壺に定まりぬ  
江戸川を越えて盆僧来りけり

横浜 三木 豊子

白南風や大道芸を遠巻きに  
湯上がりに夢二の浴衣ゆるく着て  
水かぶり金鈴揺らし荒神輿  
尾瀬沼の池塘行き交ふ銀やんま  
主なき庭に鈴生り枇杷熟るる

横浜 星野 信子

草の葉に白き雨粒夏至の朝  
日のかげら残して暮るる半夏生  
母と子の同じ香りの洗ひ髪  
十薬を一叢抜いて干しにけり  
黒南風やギターケースの錆びし鍵

川崎 新妻 奎子

閑散として投票所蚊遣の香  
母待ちて飽かず眺むる蟻の穴  
初蟬や病院裏の遊園地

大汗をかかなくなりし我が余生  
口紅の色鮮やかにサングラス

川崎 大久保 進

相老いて言はず語らず端居かな  
籐寝椅子心の風身に身を沈め  
水無月や街掻き乱すざんざ降り  
三越の獅子と妻待つ西日中  
新聞紙丸めて打てり無手の蠅

鎌倉 恒川 清爾

地震跡を一輛電車夏木立  
戦禍跡駆くる跣の子に笑顔  
トンネルの先は万緑極楽寺  
涼しさや友の逝きたる山青き  
夏空を帰る飛行機パンダ乗せ

伊勢原 佐藤 和子

葭雀葭の葉先を鳴き移り  
大仏の切れ長の目の涼しさよ  
夏蝶やびたりと風の止みし午後  
朝ほらけ素顔のまままで蓮を見に  
投票所まで夕焼の上り坂

静岡 大村 峰子

沙羅散りて狭庭浄土となりにけり  
梅雨晴間背山に響くチェーンソー  
新茶供ふ夫の位牌を曇らせて  
庭の枝に脱ぎつ放しの蛇の衣  
ソプラノの一匹増えて蟬の声

静岡 海野 みち子

吹き上ぐる湖風涼し夫婦句碑  
夕霧の湖面這ひ来る早さかな  
日雷ぴんとそば立つ猫の耳  
糸ほどのかまきり止まる門扉かな  
炙花刈りて匂へる無縁墓

静岡 宮崎 知恵美

万緑の峠に残る牛舎かな  
あめんほの小さき波紋を重ねたる  
竿の先尺取虫の宙探る  
子燕や親の戻らば大き口  
蔓たぐり蔓にからまる放置畑

静岡 望月 敏男

素振りして出を待つ打者や土灼くる

ポケットに未完の一句麦の秋

高らかに田植機吹かす八十路かな  
残る蟬今日の時間を鳴きつくす

万緑や富士を背の通学路

静岡 藤原千代子

人悼む螢袋の傾ぐ夕

引く波を巻き込む波や夏さざす

鳳蝶浜辺の駅舎越え行けり

弟に加勢のありて水鉄砲

氷小豆尽きぬ介護の話かな

静岡 荻野加壽子

病棟の暗きあかりへ火蛾ひとつ

携帯に揺り起こさるる三尺寝

一点の鷺一面の青田風

思ひ出は途切れ途切れに貝風鈴

帆のごとく白シャツに風集まり来

嘘泣きの皺ひとつ無きハンカチーフ

静岡 小川 明美

川風の涼し不動へ続く道

沢蟹取り不動の岩に手を入れて

神の池に森青蛙生まれたり  
本陣に雪駄の高音風薫る  
秋葉参りかびの匂へる仁王堂

静岡 藤本節子

街路樹の影のふくらみ緑さす  
身を寄する電柱の影風死せり  
マニキュアの緑魔女めく冷房車  
山百合の蕊に蠢く翅の音  
鱧網に嘴を拭ひて海鵜かな

静岡 大長文昭

藻の花に亀の頭のぼつかりと  
石斛の花そよ風に香を撒けり  
あめんぼの群れを散らせる鯉の髭  
夏安居の作務にひとりの比丘尼かな  
泉より巴の水輪湧きあたる

静岡 加山ひさ子

たわい無き話弾めりソーダ水  
見当たたらぬ帰りの切符夕焼雲  
地下道へ緩き傾斜や桜桃忌  
夏布団蹴飛ばす兄と弟かな

眼前を素通りしたり黒揚羽

静岡 石川裕子

塵袋に十葉の香の重さかな  
着流しの茅の輪をくぐる下駄の音  
黒揚羽朝一番の勝手口  
空白の広告看板大西日  
干梅をひとつふめり杖の夫

静岡 本多ひとみ

伐採に蟬一斉に散らばりぬ  
無造作に新藁積める峡の小屋  
傘傾げ金髪光る案山子かな  
秋蝶や溶岩の台座に翹たたむ  
川底の石に躓く厄日かな

静岡 杉澤修

楊梅の夕陽に染むる一樹かな  
ひとり減りまたひとり減る夕端居  
覗かるることに慣れて獅子頭  
恙なきひと日の終り水打てり  
潮騒のかすかに宮の松涼し

射水 成瀬真紀子

電線に武者振ひして燕の子  
落日の光一条夏至の海  
夕焼の中の太陽いびつなり  
朝焼をいく度窓打つ蚊喰鳥  
夏木立ほほをなでゆく千の風

金沢 今越みち子

滴りの下俱利迦羅の分水嶺  
草藪の中に虎尾草出城跡  
バス停に馬頭観音青田風  
蛤を投げて千里浜海開き  
スワンポート波止に諏訪湖の水鏡

金沢 伊藤美音子

老鶯や石と化したる流人墓  
飛石に腹温めをり青蜥蜴  
登り窯崩れて久し栗の花  
からたちの花の先なる大手門  
ギヤマンに金平糖や朝茶の湯

金沢 高田たみ子

採血に眼を閉づる日焼顔

七月の緑ふかまる卯辰山  
公園の明かりのほやけ熱帯夜  
夜濯や百円玉のこぼれ落ち  
短冊の師の文字涼し奥座敷

金沢 豊田高子

百態の雲浮く空や晩夏光  
塩を撒く鯉の生簀や梅雨に入る  
月涼し天女に変はるシテの舞  
赤ん坊とひと日始まる金魚玉  
首上げて光まみれや蛇泳ぐ

金沢 松井佐枝子

涼しさや山畑を行く沢の音  
炎天のそこてふ遠さ一休庵  
夏霞消えぬひと日の遠嶺かな  
早暁の青紫蘇の香を摘みきたり  
朱鷺色の朝焼雲の広がりぬ

金沢 石川純子

子供部屋闇の沈める螢籠  
夏休み埋まらぬままの日記帳  
子らの瞳七夕飾見上げたる

青芒つづく街道茜雲

金沢 南 恵 子

母の日や花に添へあるありがたう

金沢 河野 尚 子

石橋は赤戸室石青葉映ゆ

武家町の路地白湧ける山法師

漁師町更地吹き上ぐ熱砂かな

仙人掌の開花を待てり月天心

高みへと上りゆく蝶纏れつつ

金沢 道場 啓 子

夕風に変はり鉄線少し揺れ

師の墓に詣で郭公たてつづけ

外つ国の騒動止まず遠花火

マンションの隅一本の夏薊

サンドバッグ野外に吊られ夏旺ん

金沢 杉 本 年 虹

拜殿の棟に鳴き立つ親鳥

植田ゆく鷺おもむろな足捌き

尻揃へ太胡瓜売る我鬼忌かな

白靴を汚さぬやうに雑踏へ

賜りし小さき茅の輪を小さき手へ

あぢさゝるや雨に叩かれ照る坊主

朝霧の呑み込む川面鮎の竿

丈六を守るや姥百合実となりて

土囊よりげぢげぢ躍り這ひ出たる

五十輛の貨車の過ぎゆく暑さかな

金沢 松下 信 子

縁先に夏至の入り日を惜しみたる

飲めぬ酒ぐいと乾す夢明易し

梅雨滂沱水墨画展けふ限り

蜘蛛の囿に雨粒きらり風立ちぬ

家庭内立場中立冷奴

金沢 北川 禮 子

揃ひ打つ百の太鼓や祭開く

野面積み続く馬坂額の花

拉致ありし入江白鷺佇めり

遊船や地震に崩れし崖望み

坂道を子に背を押しされ滝見かな

金沢 清水 英 理 子

復興へ立葵の緋上りをり

弟は負けず嫌ひよかき水  
朝涼や小さき家事を手際よく  
青楓水占ひの文字淡く  
はんなりと団扇を使ふ大女将

七尾 谷 渡 末 枝

豆腐屋の午後のしづけさ軒風鈴  
打水や離れに「無事」の軸飾り  
蔵毀つ土の湿りを青大将  
散髪を一日延ばし梅雨明くる  
羅やをんな盛りの京言葉

白山 加藤美 栄子

とうふ屋に嫁ぎ半生清水汲む  
白髪をばつんと切るやサングラス  
原爆忌烏の嘴のはがね色  
新幹線す通りの駅立葵  
緑蔭に黒子とかり寝木偶人形

敦賀 倉谷ます美

梅雨寒や菩提寺跡の煤柱  
虎が雨たちまち消ゆる竹生島  
新じやがを焦がさぬ様に味からめ

絵硝子は近江八景夏座敷  
しらじらと明くる枕辺四十雀

敦賀 鶴田勝子

ぼら納屋あと残る岬や青葉潮  
癩封じの樹の瘤なづる青嵐  
備蓄米とどく芒種の夜明けかな  
大瑠璃をぬりつぶしたる海夕焼  
病床の母に一口氷菓子

敦賀 中川雅月

頑強な夫の骨折虎が雨  
一枚の檜磨くや芒種の日  
門前に氷菓売り来て午後三時  
甚平や親子揃ひの伊予絣  
籠枕明治生まれの父の場所

敦賀 中村優

自転車で鉦鳴らし来る氷菓売  
シーグラス集むる子らや夏の浜  
生ビール琉球硝子に夕日満つ  
山藪の清き葉の色紡ぎをり  
黒塀の角より白き夏帽子

敦賀 為永 香月枝

電線に並ぶ鴉や枇杷熟るる  
虎が雨匂友の愛猫逝く知らせ  
青嵐令和の御世の米騒動  
藤房の撫づる項や城晴るる  
遊女墓肩のまろきに毛虫這ふ

徳島 福島 吉美

ふる里や鶯と争ふ梅雨鴉  
荒梅雨やまんばう食べに迷ひたる  
盆栽の松に脱ぎある蛇の衣  
湯あがりの全身に打つ天瓜粉  
墓灼けてたつぷりかくる井戸の水

徳島 村上 和義

つばめ来る田んぼの中の藍屋敷  
兵籍簿繰ればうつすら紙魚の痕  
白い雲見てゐるだけの籐寝椅子  
海賊の統べし瀬戸内雲の峰  
提灯がさばく人波阿波踊

徳島 宮西 修一

貝塚の入口暗し著莪の花  
祖谷奥は雲湧く処栗の花

百日紅手押しポンプのある墓場  
山嶺に高き鉄塔月涼し  
犬抱いて挨拶かはす夏の夕

徳島 平岡 功

紫陽花の秘めたる色を雨解く  
鈍色の雲を黄に染め梅雨夕焼  
川原に釣糸垂らす夏帽子  
花栗の香り繋がる土佐街道  
参道に風の道あり夏木立

石井 木内 マヤ

雷鳴や遠く近くの空光る  
とりどりの羽音聞こゆる木下闇  
胎内の揺れの続きかハンモック  
大屋根の上にもまつ赤な夏の月  
夏つばめ地に触るるかに翻る

小松島 岡田 あゆみ

忘れつばい二人に金魚反転す  
よく笑ふ前歯のない子風薫る  
細長き猫の瞳孔梅雨あがる  
引き裂けばまこと四角や蚊帳吊草  
鷺の嘴に大きく跳ぬる濁り鮎

福岡 宮田千恵子

四葩咲くたつぷりと雨ふふみゐて  
父と子の並びて歩む沖繩忌  
青蛙鳴くや目の玉寄りおうて  
夏燕ゆるくするどく宙返り  
軒の下すこし楽しき夕立かな

長崎 丸本祥夫

受験子を追ひ越しながら励ませり  
らふそくの影の大きな内裏雛  
水飲みてすぐ恋猫の身震ひす  
検番の名札が鳴れり春一番  
豆飯の炊けしと母の階下より

西海 山下敦子

泳ぎては耳穴灼けし岩にあて  
殉教の鳥々埋むる合歓の花  
すいとんを啜り黙せる終戦日  
夜更しを守宮の狩のお供して  
夏空や二度と戦火で乱さぬと

宮崎 中山宣

波音に声振り絞る杜鵑  
新燃岳地震小刻みに梅雨あがる

龍神の靈に蟹這ふ波の音  
黒潮の藍の色濃く松の芯  
獣道抜けて一望七変化

宮崎 中山芳教

夏波に社の司振る御幣  
岩鼻に釣人二人夏の雲  
薄暑光大御神社の石畳  
神座の龍神信仰青葉潮  
渚行くタイドプールの日傘影

宮崎 鳥居達史

耕耘機錆び凌霄の咲きのぼる  
エイジシユート遙か池越え雲の峰  
庭畑のひね茄子ちくと葉隠れに  
田の神の笑まふ旧道草いきれ  
夏の朝田の番小屋に地鶏鳴く

那覇 中本清

首蓓の風の広ごり岬鼻  
村産井日の斑に流れ水馬  
一本の杖となりけり飯匙倩乾ぶ  
火焰木雨後のほてりを天に咲く  
荒梅雨の海底不発弾の黙

六月の風に眩しき特攻花

西原 宮城

勉

夕星へ水恋鳥の唄甘し  
緑蔭の風よ魂取り戻す  
單純の喉ごしやさし冷奴  
真砂路の海へ真直ぐや福木散る  
万緑の窓や病衣をたたむ朝

豊見城 渡 真利 真澄

夏ぐれや芭蕉畑を波立たせ  
緑蔭や砂地掃きある御嶽森  
水口に鯉の混み合ふ暑さかな  
尺蠖の拭かれてゐたる草の尖さき  
片蔭を来て行列の殿に

ペリ 鈴 木 波 江

独り居の小蟻殺めて昼深し  
投票を終へし安堵や薔薇の壁  
蚊食鳥唾へて猫の朝帰り  
蜥蜴消ゆ一瞬じつと我を見て  
河童忌や句集読む手を顎に置き

# 俳句

10月号  
予告

9月25日発売

予価1,100円(本体1,000円)®

巻頭作品50句 中村和弘  
作品21句 橋本榮治・山下知津子

角川源義没後50年特集

いま、〈抒情〉と

〈軽み〉を問う

- 50句選十鑑賞
- 人と作品
- 抒情の復権
- 軽みの真義 ほか

## 隠岐の楸邨俳句

「寒雷」を読む 石寒太×小澤實

宇多喜代子 特別作品15句「夏の雲」

角川俳句賞作家の四季 15句……若杉朋哉

特別対談採録

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売！ 電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>) など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>

# 同人作品の佳句

江見悦子選

今日咲きし朝顔今日をたたみをり  
川音や瑠璃ひとすぢの糸とんぼ  
決心のそのうちゆるぶ氷水  
不意撃の機銃掃射や大夕立  
干梅の匂ひ夜風に濃くなれり  
フランベの炎を高くパリー祭  
籐寝椅子足の先なる小さき富士  
断崖にあの日の波濤沖繩忌  
蛇に会ひ身の内どこかするりとす  
三越の獅子と妻待つ西日中  
地震跡を一輛電車夏木立  
帆のごとく白シャツに風集まり来  
塩を撒く鯉の生簀や梅雨に入る  
山嶺に高き鉄塔月涼し  
荒梅雨の海底不発弾の黙

中鉢弘一  
阿部澄  
大月玲子  
三屋英俊  
内田郁代  
穂苺照子  
加賀葉子  
下嶽孝一  
喜多尾明子  
大久保進  
恒川清爾  
荻野加壽子  
豊田高子  
宮西修一  
中本清

同人会だより

「万象」オンライン同人句会の参加者募集

オンライン同人句会は、全国の「万象」同人が共に切磋琢磨する場として発足し、今年で4年目に入りました。PCまたはスマホの簡単な操作で参加することができます。オンライン同人句会に興味のある方は、事務局へお気軽にお問合せください。

◆オンライン同人句会の実施要領

〔句会は「夏雲システム」を使用〕

- ① 対象は全国の「万象」同人とする。
- ② 月例で行い、句会費は無料とする。
- ③ 投 句 3句
- ④ 選 句 主宰…10句  
顧問・役員…7句  
同人…3句

◆参加申込はEメールで事務局（小池清晴）まで

メールアドレス k217122gogo@forest.ocn.ne.jp  
（電話番号 0900-4132-5807）

・申込の方には事務局より簡単な操作説明とパスワードを返送いたします。

8月の「万象」オンライン同人句会高点句

- 8 夕風のほどけて烏瓜の花 穂苅 照子（流山）
- 6 その中に黒き折鶴原爆忌 穂苅 照子（流山）
- 6 路地裏に風うづくまる日の盛 下嶽 孝一（東京）
- 6 婦省子へ何でも包む新聞紙 穂苅 照子（流山）
- 5 着道楽食ひ道楽や生身魂 谷渡 末枝（七尾）
- 4 捨てきれずまた仕舞ひ込む生身魂 南 恵子（金沢）
- 4 絶海の俊寛の島大西日 中村 千久（志木）
- 4 噴水のもうこまでと言ふ高さ 荻野加壽子（静岡）
- 4 お愛想を乗せて女将の団扇風 山本 右近（さいたま）
- 4 穂を撫でて溜息一つ大旱 山本とく江（柏）
- 4 枯れ時も散り時もなく水中花 桑原優美子（東京）
- 4 消え際に音ついてくる遠火花 山本とく江（柏）
- 3 日を浴ぶる桃ヤルノワールの乙女 三屋 英俊（佐倉）
- 3 唇に貼り付く髪や原爆忌 荻野加壽子（静岡）
- 3 夏草や今穂やかにチャシの跡 中鉢 弘一（札幌）
- 3 津波来る列島一日滯暑かな 山本とく江（柏）
- 3 無造作に束ねし髪や猫じやらし 紅露 恵子（札幌）
- 3 蟬時雨森の中なるドイツ橋 平岡 功（徳島）
- 3 風死すや呂律回らぬSP盤 荻野加壽子（静岡）
- 3 書をめくるほのかな風の秋めきぬ 山本 右近（さいたま）
- 3 遙かまで続く城壁大西日 南 恵子（金沢）
- 3 一日の過ぎる速さの冷素麺 鈴木 波江（ベルリン）
- 3 顔に泥とばし二塁へ雲の峰 江見 悦子（東京）
- 3 けんめいに言訳する子玉の汗 宮西 修一（徳島）

（\*句頭の数字は点数を示しています）



今回も古今の佳句・名句に触れながら遊んでゆきましょう。空所に「りっしんべん（卜）」の付く漢字を入れましょう。

- |    |                 |       |
|----|-----------------|-------|
| 1  | 仏□は白き桔梗にこそあらめ   | 夏目漱石  |
| 2  | 柿赤く旅□漸く濃ゆきかな    | 高濱虚子  |
| 3  | 用なきに野川に來たり年□しむ  | 細見綾子  |
| 4  | 嫁が君飢ゑの記□の遠くあり   | 沢木欣一  |
| 5  | 春□むおんすがたこそとこしなへ | 水原秋櫻子 |
| 6  | 七夕竹□命の文字隠れなし    | 石田波郷  |
| 7  | この町やかつて波郷の□手    | 内海良太  |
| 8  | 死を□むその夜の梅雨の紅拭ふ  | 鈴木真砂女 |
| 9  | 梅雨の犬で氏も素□もなかりけり | 安住 敦  |
| 10 | 鬼は外バリトンの父□かしき   | 飛高隆夫  |
| 11 | 認識と抒□の間に豆を打つ    | 内海良太  |
| 12 | 夏□しむ貝殻に耳押し当てて   | 黛まどか  |

【正解】

- |    |   |
|----|---|
| 1  | 性 |
| 2  | 情 |
| 3  | 惜 |
| 4  | 憶 |
| 5  | 惜 |
| 6  | 惜 |
| 7  | 懐 |
| 8  | 悼 |
| 9  | 性 |
| 10 | 懐 |
| 11 | 情 |
| 12 | 惜 |

おいしい俳句

第8回 嵐山光三郎

梅干してをんなの生身酸つばくなる 三橋鷹女

鷹女は気性の激しい俳人で、「この樹登らば鬼女となるべし夕紅葉」という一気呵成の強い口調の句がある。怖いけれど豪華絢爛で目が眩む。初期の句には「夏痩せて嫌ひなものは嫌ひなり」と潔癖なる宣言をするから思わず肖像写真を見ると、細おもてで、黒ぶちの眼鏡、目もとが涼しい着物姿の麗人である。

大正十一年（二十三歳）、歯科医師の東謙三（俳号・劍三）と結婚し、昭和八年、市ヶ谷柳町に転居。「牛込句会」を結成して自宅で月の句会を開催した。

日本敗戦後（昭和二十七年）、第三句集『白骨』を刊行して、武蔵野市吉祥寺に新居成る。昭和三十六年（六十二歳）第四句集『羊齒地獄』刊。この時代は敗戦で食料が乏しく、どこの家も梅干し漬けを作った。梅の実を塩漬にして取り出し、日にさらして干す。梅を干している女の身が酸っぱくなるという感慨。「羊齒地獄 掌地獄 共に飢ゑ」る時代でした。「木の葉髪ちりちり灼いて狂ひ出す」「梅干ひとつぶ 骨壺を掻きまはし」。

ぼくらの世代は米軍が供給した脱脂粉乳（豚用飼料）で育ち、あまりの悪臭に悶絶したことを思い出した。

公益団法人俳人協会

# 佳句佳句しかじか

同人作品鑑賞(八月号)

神田美穂子

農具市並ぶるだけの無愛想 大内佐奈枝

農閑期に農作業の準備のために行われる農具市。本格的な農具市は15年以上前に山梨に行った時、風花の舞う中10軒ほどの市にたまたま遭遇したことがあった。農機具に混ざり、動物の畏が地べたに並べられていた。残念ながらこの市町村だったかは記憶がない。

売り手は大方が無口、好き勝手に見て行けとばかり、聞かれれば無愛想に二言三言答える人が多いが、中には饒舌で、身振り手振り熱心に説明する商売上手もいたりする。作者の見た情景は並べるだけで無愛想な店。見たままではあるが、素朴な農具市の様子が、無駄なく表現されている。

田植の子顔に手足に泥うれし 中嶋久登

「泥うれし」に田植をしている子が田植を楽しんでいる様子が生き生きと表現されている。都会では泥に触ったこともなく生活している子が多い中、手足ばかりか顔についた泥までを楽しんでいる。これが子供本来の姿なのかも知れない。今や田植も機械化され泥にまみれての田植風景はほとんど見られなくなっている。この句は学校の体験学習や、地域の村おこしの風景かもしれない。

影生まれ風音生まれ花は葉に 穂苅照子  
桜が咲いている時ももちろん影はある。しかし花が散り葉

が始めると影は一層濃くなる。そして風にそよぐ葉ずれの音も大きくなる。何気ないその違いを素直に詠む姿勢に共感を覚えた。「生まれ」のリフレインでリズムもよく、影と風の音を楽しんでいる作者が見えてくる。単なる写生ではなく詩として抄い上げられている所に魅かれた。

母の日の掃除ロボット稼働中 桑原優美子

最近の主婦の家事を助けてくれる電化製品が増え、昭和の時代の主婦の家事労働と比べ随分楽になり雲泥の差がある。掃除ロボットもその一つ、最近では拭き掃除までできるロボットが出現し、我が家の10年以上前のそれとは大きな違いがある。この掃除ロボットはもしかしたら母の日のプレゼントかも。「母の日」の季語が現代の母の日を象徴しているかのようだ。母の日も母の代わりに掃除をしてくれていたロボットに感謝感謝の一日であったことだろう。

夏めくや野菜のをどる中華鍋 大久保 進

食べ物のおいしそうなのが鉄則である。中華鍋に炒められているカラフルな夏野菜が、まるで踊っているようだ表現した感性に共感を覚えた。トマトの赤、ピーマンの緑、パプリカの黄、茸の白、どれも食欲の増す食材ばかり。これで今年の夏も無事乗り越えられそう。奥様の愛情たっぷりな、いやいや作者の男の手料理かもしれないといういろいろ想像が膨らむ句。「夏めく」の季語もよい。

春風につむじの辺り撫でらるる 望月敏男

それとなく俳諧味を感じる句。優しい春風に自分のつむじの辺りを撫でられたというのである。作者のつむじはどのあ

たりにあるのだろうか、大方の人は頭頂部にあるものだが、二つある人や、つむじ曲りという言葉があるように頭頂部より位置がずれている人もいる。つむじを春風に撫でられて気分爽快であったに違いない。時々作者の句に思いがけない所から詩因を探り当てているものがあり、このようなことも句材になるということを教えられる時がある。80歳を過ぎてなお好奇心旺盛な作者の句に刺激を頂いた。

初蝶へ日溜りの席譲りけり 荻野加壽子  
目の前に現れた「初蝶」に、思わず今座ろうと思っていた日溜りの席を譲った作者。その瞬間驚きと喜びに同時に見舞われたことであろう。そして作者の優しい心根の現れた句となった。初蝶の句として類想感のない句である。蝶でも、夏蝶でも、秋蝶でもましてや冬の蝶でも凍蝶でもない。絶妙な季語の斡旋は作者の持ち味である。

カーテンを開くる楽しみ五月かな 山下敦子  
五月は一年で一番清々しい季節。このような季節がもっと長く続けばよいのと願うものの、最近の地球環境の変化は甚だしい。今年も夏が四か月も続くことになるかと思うと憂鬱な気持ちでいる人は多い事であろう。

作者は朝一番にカーテンを開けることがルーティンになっているのであろうか。毎朝心躍る思いでカーテンを開くと、朝日に眩しい新緑に目覚めを促され心も体もしゃっきりとする。きつとこの季節が一年で一番大好きな季節であるに違いない。私も全く同感である。

鴨帰る右岸左岸のビルの影 中山芳教  
鴨は人間にとって最も馴染み深い水鳥と言われ、都会でもよく目にする。右岸左岸のリフレインにより、街の中心部を流れる川が想像される。帰り行く鴨に「また来年もこのビルの谷間の川に戻っておいで」と見送る作者の優しい眼差しが見えて来る。

喉飴を舌にくるくる蝶の昼 中本 清  
冬場は喉飴のお世話になる人は多いだろう。しかし春の花粉症の季節も出番はあるようだ。仕事をしながら舌に遊ばせている喉飴、ふと外に目をやればまさに春のうららかな景色の中を蝶がよぎる。口中の喉飴は舌に、そして窓の外の蝶も「くるくる」と両方にこのオノマトベが働いているかのように思える。何気ない日常の一齣を、俳句として抄い上げた詩心に共感を覚えた。

外にもるる機音の癖日永し 渡真利真澄  
作者は美術系の学校を卒業し、沖繩の地で機織をしているとかつてお聞きした記憶がある。今年の4月号には「花織の花を並べて機始」6月号に「鶴亀の色差し終ふる日永かな」7月号に「糸練りの音にねむたし春の昼」糸枠に色の植えゆく日永かなの句があり、機織を生業としている作者の暮しぶりが詠まれている。「機音の癖」とは機織をしている人ならではの発見かも知れない。夕暮の機音と「日永し」の季語は作者の実感であろうが、それとなく響き合っている。随分長いこと作者とはお会いしてないが、爽やかな笑顔が思い出される。

新田の荘 大木 茂

夏燕利根の渡しに客一人  
 県繫ぐ無料の渡しし雲の峰  
 縁結び門の蹴放し小蟻這ふ  
 菩薩絵の線画の板碑郭公鳴く  
 新田軍旗揚げの杜四葩咲く  
 郭公鳴く縁切り寺の駆け込み門  
 木下闇義貞内侍の小さき墓  
 青田風旧石器人駆けし郷  
 江戸期より銅街道驟雨来る  
 石灼くる忠治の墓所は柵の中



『太平記』には、新田義貞は、鎌倉時代末期から南北朝時代にかけて、後醍醐天皇の忠臣として活躍したことが記されている。

義貞の育った新田の荘（現在の太田市周辺）は、夏は激しい雷雨、冬から春先には、厳しい空つ風が吹き荒れる。この環境は、氣質が荒く、義理人情に厚い人間を育む。天保の大飢饉の際、農民を救済した俠客國定忠治は、太田市に隣接する國定村（現在の伊勢崎市）に生まれた。義貞、忠治には、義理人情に厚い血脈が繋がるように思う。

梅 雨 桑原優美子

走り梅雨包丁を研ぐ匂ひして  
梅雨の夜の路面電車は灯をこぼし  
抽斗の重く軋むや梅雨の家  
自転車の新しき錆び梅雨ごもり  
店先の列伸びてをり梅雨晴間  
鉄骨を組む足場より梅雨の蝶  
雑踏の一人ひとりに梅雨の顔  
青梅雨や椅子一台の理髪店  
地下鉄の出口にまどふ梅雨の傘  
梅雨明けし草間彌生の水玉に



故飛高隆夫先生の浦和句会  
で俳句を一から教えて頂き、  
今は中村千久さんのご指導を受けています。

千久さんの「俳句の軸足はあくまで写生であるが新しい句に挑戦しよう」という掛け声で、私も新しみのある句を詠みたいと励んでおります。

東京生まれの東京育ちなので季語にある事象を見ることがないことも多々あります。叙情を感じるものを、都会の無機質な風景の中に求めています。

古き良き町 内田郁代

町川の細き流れや草茂る

東京の葛飾区、江戸川区に隣接する松戸市は東京都市圏。いわゆる千葉都民の多い都会的な印象があるが歴史の町、水の町でもあるらしい。掲句によつてそれがよくわかった。今は狭められてはいるが皆に親しまれている優しい川の流れと、これからもっともっと勢いを増してくる草の緑。俳句の言葉が湧き上がつてくる。

花うばら十歩で渡る春雨橋

この橋はJ R松戸駅から東へ徒歩5分であり、8月には螢の鑑賞もできるとか。初夏の五弁の可愛い白い花の香と「春雨橋」と言う名に、美しい風景が眼前に浮かんだ。

川岸の光あつめて桜の実

桜の花が散ると葉陰に小さな実が結ばれているのを発見。熟すと紫色になる。食べられるが決して美味しくはないらしいこの実は、まだやつと赤みが差してきた頃。上五中七にこの実の初々しい輝きと、それを見つけたときの作者の喜びが伝わって来た。

徳川の名残の屋敷清和かな

徳川家とこれほど御縁のある地とは存知上げなかった。静岡に所縁の徳川慶喜の弟、明武の屋敷「戸定邸」もJ R松戸駅から西へ徒歩12、3分とある。

「清和」の季語により皆に親しまれ大事に手入れ保存されてきた佇まいが読みとれる。十句を通してご一緒に吟行させて頂いたような満足感を得ることが出来た。

火縄銃 草間三香子

五六粒含む外郎花の冷え

今から650年前、陳外郎(帰化名)により伝えられた透頂香(陳家伝来の家宝薬)が「外郎」。亡命した福岡で広めその後子孫たちが京都へ伝えた。今は小田原の外郎家のみで扱っている。仁丹に似ていて万能薬とされている。

作者にとつて「花の冷え」の頃の体調維持には欠かせないものなのだろう。「含む」が言い得ている。

竹の子の出るらし四方罫はしる

今年是不作でいつも届けてくれる友人も嘆いていた。「竹の子」の句は実物や掘る行程を詠む事が多いが、掲句は地の様子を詠んでいる。「出るらし」と「四方」の措辞で大きさやわくわく感が想像できる。類想感がない。

県境の端突つ切つて恋の猫

早春の恋猫を良く表している。どんな障害も跳ね除ける力は疎ましくもあるが羨ましい。だが「県境の端」でそんなに遠距離ではないのか。

梅東風や大地揺さ振る火縄銃

タイトルとなつている火縄銃の句である。

東京には幾つもの史蹟が憩いの公園として残されている。「徳丸ヶ原公園」もその一つであろう。明治維新に繋がる火縄銃。西洋流火術鉄砲隊保存会による発砲の瞬間を間近に体験された驚きが中七の「大地揺さ振る」に表出。しかし火薬の匂いの中に、ふと春を感じる柔らかな風に気が付いた。季語との取合わせが効いている。

## 第二十三回万象俳句賞 発表

万象俳句賞 尾を高く 穂苺照子



穂苺照子氏

次点 一日の春野 辺野喜宝来

佳作 京ことば 松永博子

第二十三回万象俳句賞は選考の結果、右のとおり決定しました。

万象俳句会

尾を高く  
穂苅照子

ゆるやかに恵方へ進む渡舟かな  
手袋を外し二拍手響かする  
声残し水輪を残し鳩  
雪吊に納まる松の眠りかな  
山茶花の散るや木洩れ日増ゆるかに  
やはらかに鯉の解きゆく寒の水  
水底の石に影あり春来たる  
山菜萸や近づくほどに黄のほどけ  
早春の水屈伸をくり返し

略歴

昭和32年 東京生まれ

平成19年 「万象」入会

平成21年 「りいの」入会

平成22年 「万象」同人

平成23年 「りいの」同人

平成26年 「りいの俳句賞」受賞

令和6年 「りいの」終刊

俳人協会会員

千葉県流山市在住

雨音を吸ひこんでゆく春の川  
啓蟄や紐締め直すスニーカー  
はくれんの翼は雨を払ひけり  
新しき切株匂ふ涅槃西風  
春昼や遅れて開く自動ドア  
泥を寄せ泥に紛れず蝌蚪の紐  
足音の濡れてゆきたり花吹雪  
かたかごの花の斜面にいつも風  
尾を高く猫陽炎を揺らし行く  
大空へ鼓動を合はせ揚雲雀  
向き合へる命八十八夜かな

#### 受賞の言葉

前任者より万象俳句賞事務局を引き継ぎ、今回は一編でも多く集まることを願ひ応募いたしました。残念ながら応募数は昨年より少なくなっていました。事務局の初仕事のご褒美に万象俳句賞をいただけたのかと嬉しく思っています。

現在施設に居る高齢の父と義母を看ているため遠出は出来ず、今年の始めから春の終わりまでの近辺を詠んだ二十句を作品として纏めました。拙い作品を評価してくださった選者の皆様には心より御礼申し上げます。また、良太先生にご報告は叶いませんが、お世話になつてゐる千葉句会、柏句会の皆様へも感謝の気持ちを伝えたいと思います。

## 一日の春野

辺野喜宝来

松籟や辺戸吟遊の春シヨール  
 日矢射してうねりやはらに春の海  
 トンネルを五つ霞の岬まで  
 集落は海へ開けりアマリリス  
 素心花の空どんよりと迂回道  
 清明の森に迷へり雨催ひ  
 降りしきる雨の中なる躑躅かな  
 林道の亀の横断のどけしや  
 浦曲より近づく雨や蒲葵の花

野へひらく白詰草の薄日かな  
 浦人へ沖の霞を引き寄せて  
 琉歌碑へうららうららと干瀬の波  
 浜独活の太く真直ぐに荒磯径  
 記念碑の地や寄居虫の穴あまた  
 師の句碑へ開く波音白薊  
 雪加鳴くけふの与論は見えぬかな  
 胸付きの王墓の礎や春落葉  
 雨降つて止んで一日の春野かな  
 コーヒーに春夕焼の満ちゆけり  
 春宵の帰り重たき句帳かな

京ことば

松永博子

買初は錦市場の箸二膳  
参道の石塊に顔仏の座  
料峭や葎戸に浮く薄埃  
春浅し愛染王の札くすむ  
立体曼荼羅へ春の日のとろり  
城濠の水面に揺るる花の雲  
友禅の金彩春の灯を弾く  
紫陽花や格天井の絵の褪せぬ  
恋文はこの塚の下苔の花

老鶯や小町ゆかりの化粧の井

夏旺ん魚板の音の乾きたり

川床の馳走となりぬ水の音

仁王門色なき風と抜けにけり

京ことばの響く蔵元新酒酌む

焼杉の山門おおふ照紅葉

近く秋や方丈一人庭を掃く

山茶花のひとひら浮かぶ手水かな

しぐるるや御香の宮の庇借る

のつそりと凍雲砂州を流れたり

冬ざるる舟屋の灯ほのかなり

## 選評

### 挑戦を期待

江見悦子

今回の応募は27編(同人15名、会員12名)にとどまった。令和3年の「創刊二十周年記念万象俳句賞」の応募に34名を数えて以来、31名、34名、40名と変遷し、今年は30名を割る結果となった。

所属会員の総数を考えれば、少なくとも1割は超えて欲しいと思う。毎年応募されてきた方のお名前がないのは寂しい。もちろん、一人一人に様々な事情があることは承知しているつもりだ。高齢化も課題の一つだろう。

「万象賞」は、同人、会員の別なく応募できる結社賞である。また過去に万象賞に輝いた方も、何度でも応募できるコンクールでもある。年に一度、作品20句をまとめ選を受けることを、自身を計る良い機会ととらえ挑戦して欲しい。

8月号で、中條睦子同人会会長が「中山純子記念俳句賞」の終了を発表された。同人にとつては、これからは年に1度の腕試しとなる。この機会を生かした多くの力作を待っています。

1位、「尾を高く」穂苅照子さん。4年ぶりの応募で選者全員の選に入り、文句のない受賞。おめでとうございます。

新年から八十八夜までの季の移りを柔らかな感性でまとめた20句。前半、様々な「水」を舞台とした詩情豊かな句に引き込まれた。後半のかつちりとした句群が、最後の句「向き

合へる命八十八夜かな」に収斂する構成に「抒情」と「認識」を感じた。令和2年の佳作「金魚の子」を読み直し、句境の深まりを頼もしく思った。

早春の水屈伸をくり返し  
大空へ鼓動を合はせ揚雲雀

2位、「一日の春野」辺野喜宝来さん。沢木欣一先生の句碑のある辺戸岬を訪ねた一日を詠んだ。取合せの句が7句。切れ、季語の斡旋に工夫があり、力を感じた。沖繩を詠む場合、独特の季語や「ウチナーグチ」(沖繩語)に頼り過ぎるさらいがあるが、この作品には感じられず、作者と共に一日を楽しむことが出来た。

清明の森に迷へり雨催ひ  
師の句碑へ開く波音白薊

3位、「東秩父」南雲秀子さん。東秩父をホームグラウンドとして頻繫に出かけて句作し、楽しんでる。モノを掴みそこに自身の姿が投影されている。破綻のない作品を安心して読むことができた。

畦道に忘れられたる蛇の衣

今回は、誤字、送り仮名や文法上の間違いの多さが目立ちました。辞書、歳時記での確認が欠かせません。それが推敲の一步です。又、ついうっかりなのでしょうが二重投句と思われる句がありました。作品が良かっただけに残念でした。未発表新作が鉄則です。

最後に、応募者の皆さんに敬意を表したいと思います。また来年、お仲間を誘って「万象賞」に挑戦して下さい。俳句が好きという気持を大切に。

## 日常と詩との接点

小林愛子

1位 「尾を高く」 穂苅 照子さん

新年から春への日常と、詩との接点を取り上げて柔軟である。全体によくまとまり、丁寧に対象に向き合っている。

水底の石に影あり春来たる

啓蟄や紐締め直すスニーカー

かたかごの花の斜面にいつも風

2位 「梅雨鴉」 久保田富士子さん

ご自身の周辺を丁寧に詠み、生活感の濃い作品となった。その中で家族との別れを山場とした構成に工夫を見る。

やはらかに泳ぎし蝌蚪に水昏る

ハンカチの花の白さや樹木葬

花散るや野道ゆるりと葬の列

3位 「梅雨の旅」 成瀬真紀子さん

旅先を詠むのに銜いが無く、ゆったりと大ぶりなのが好ましい。細かい所にも目が行き届き実力を発揮している。

安曇野の遅き田植の済みにけり

海無き地に祀る海神大南風

神苑の桑の実ならばをろがみて

## 甲乙付けがたく

中村千久

上位となった作品一つひとつに、連作としての創作意図を感じることが出来ました。個性豊かな作品に順位を付けることは難しいものでした。

1位には松永博子さんの「京ことば」。令和6年度の新人賞受賞者は今が旬のようです。京都の四季折々を丁寧に切り取ってみせてくれました。

買初は錦市場の箸二膳

立体曼茶羅へ春の日のとろり

京ことばの響く蔵元新酒酌む

2位は村上和義さんの「祖谷の郷」。新年から冬までの祖谷の情景が、地元作者ならではの視点で詠まれた思いの籠る作品でした。

雉鳴いて山の暮しの動きだす

霧晴れて山の奥にも山見えて

山彦のよく響く日や秋の空

3位に穂苅照子さんの「尾を高く」。独特の感覚と表現が印象に残るものでした。受賞、おめでとうございました。

雪吊に納まる松の眠りかな

やはらかに鯉の解きゆく寒の水

尾を高く猫陽炎を揺らし行く

## てらいのない作品を

福島せいぎ

「第23回万象俳句賞」に輝いた穂苅照子さんの作品「尾を高く」は、選者10名の内6名が最高点という断トツの成績であった。近年にない快挙で心よりお喜び申しあげます。どの句も柔軟な詩性があり快い読後感を生んでいる。

やはらかに鯉の解きゆく寒の水

水底の石に影あり春来たる

10	9	8	6	6	5	4	3	2	1	順位
宮沢賢治と 神の世界	東秩父	城ありて	水無月	梅雨鴉	祖谷の郷	梅雨の旅	京ことば	一日の春野	尾を高く	作品名
大内マキ子	南雲秀子	松田好子	一由久美子	久保田富士子	村上和義	成瀬真紀子	松永博子	辺野喜宝来	穂苅照子	作者名 選者名
	8		7	3			1	9	10	江見悦子
	6		2	9		8	5	7	10	小林愛子
3		5			9	6	10	7	8	中村千久
	2		8		3		1	10	7	福島せいぎ
3	2	8	6		4	5	7	9	10	前田貴美子
		3	2	6	7		4	10	9	榎本文代
	3	1	5	6		7	4	9	10	神田美穂子
8		3			9	2	10	4	6	林陽子
	2	8	3		1	7	4	9	10	三屋英俊
7		4		9	6	5	8	1	10	沢辺たけし
21	23	32	33	33	39	40	54	75	90	合計得点

山菜萸や近づくほどに黄のほだけ  
私が1位に推した辺野喜宝来さんの「一日の春野」は、沖繩の辺戸岬の春の風物が美しく描かれている。季語のあしらいと固有名詞がうまく調和している。

浦人へ沖の霞を引き寄せて  
琉歌碑へうららうららと干瀬の波  
師の句碑へ開く波音白薊

2位には山本瑤子さんの「四国三郎」を選んだ。吉野川河口の風景を真面目に写生している。

初日の出達磨となりてあらはるる  
潮入りの川はここまで堰の春

### 輝く日常の中の言葉たち 前田貴美子

1位「尾を高く」穂苅照子さん。自然との挨拶。無理をさせない日常の中の言葉たちが、20句の舞台にその立ち位置を得て輝く。これは、作者の作句姿勢そのものであろう。

水底の石に影あり春来たる  
山菜萸や近づくほどに黄のほだけ  
春昼や遅れて開く自動ドア

泥を寄せ泥に紛れず蝌蚪の紐  
かたかこの花の斜面にいつも風

2位「一日の春野」辺野喜宝来さん。欣一句碑が立つ沖繩辺戸岬への旅吟。固有名詞を極力おさえ、出会いの景に心遊ばせ、句を楽しむ。作者が纏うのは、欣一の吟遊の風。

トンネルを五つ霞の岬まで

21	19	19	16	16	16	15	14	13	12	11
武家通り	夏は来ぬ	放蕩の風	三保の松原 二十景	食ひしん坊	箱庭の町 ぶらぶらと	四国三郎	いのち映ゆ	箱根	隅田川	故郷の冬
小川明美	為永香月枝	入河大河	本多ひとみ	伊東文恵	丸本祥夫	山本瑤子	下嶽孝一	永田公香	小池清晴	恒川清爾
2				4				5		6
	1			3			4			
					2			4	1	
	4		6			9	5			
1										
1					5				8	
									2	8
			1					7	5	
		5								6
							3		2	
4	5	5	7	7	7	9	12	16	18	20

無得点は省略

浦曲より近づく雨や蒲葵の花  
野へひらく白詰草の薄日かな  
浦人へ沖の霞を引き寄せて  
雨降つて止んで一日の春野かな  
3位「城ありて」松田好子さん。現場を詠むという事は自身がどう対峙し、対話し実感したかという事だ。景の中に句の中に作者が立っていないければ、観光案内文でしかない。

城ありて人集ふ邑花盛り  
不意に群れ一揆の里の秋あかね  
願かけの寺曼珠沙華白ばかり  
雁渡る藍鼠の空見上げたり  
武家町の堀に菰かけ冬深む

## 新しい力

榎本文代

今回の応募作品は27編、例年と比べて作品が少なかったことは残念であったが、会員の方の活躍に新しい力を感じた。  
1位「一日の春野」辺野喜宝来さん。沢木先生の句碑の立つ辺戸岬を巡った一日が纏められている。沖縄最北端の地が実感を持った写生の眼で詠まれ、風土色も出ている。

集落は海へ開けりアマリリス  
浦曲より近づく雨や蒲葵の花  
雪加鳴くけふの与論は見えぬかな  
2位「尾を高く」穂苜照子さん。詩的な感性の作者。情感豊かな作品が揃っている。

ゆるやかに恵方へ進む渡舟かな

雨音を吸ひこんでゆく春の川  
かたかごの花の斜面にいつも風

3位「隅田川」小池清晴さん。春の始まりから冬の終わりまで、隅田川の情景があたたかく詠まれた。ただ句中の「隅田川」は外したい。句の奥行きが損なわれると思う。

三色の言問 団子 春兆す  
梅雨入や舳先連ねる屋形船  
青鷺の横に釣り人並びゐる

### ありのままから詩へ

神田美穂子

今回は1位2位はすぐに決まったが、残りの8作品を決めるのに何日もかかり難渋した。

1位「尾を高く」穂苅照子さん

冬から春にかけての身辺句で気負いがなく、単なる報告の写生句ではない作品群に手応えを感じた。地名、固有名詞に頼ることなく20句に纏めた実力に迷うことなく1位とした。

早春の水屈伸をくり返し  
はくれんの翼は雨を払ひけり

2位「一日の春野」辺野喜宝来さん

作者の住む沖繩のある一日を纏めて、詩心があり自然体で嫌味がない。何より類想感がない言葉の斡旋に共感した。

野へひらく白詰草の薄日かな  
雨降つて止んで一日の春野かな

3位「故郷の冬」恒川清爾さん

故郷を過去を含めて20句に纏められている。故郷の景が

次々に映像として浮かんでくる句が多く3位とした。

風花や牛の声する大葉屋

羽織着て父の代理の報恩講

今回の応募作の中に地名や固有名詞を多用している作品や観念句が散見され残念に思った。

### 一つのテーマに沿った20句を 林 陽子

一句の独立性は勿論重要ですが、連作として一つのテーマに沿い起承転結が整っている20句に注目して選をしました。

1位「京ことば」松永博子さん。小町ゆかりの寺、隨心院を中心に新年から春夏秋冬の京都を季語に寄り添い、丁寧に詠まれていて心地良かった。

料峭や葦戸に浮く薄埃

夏旺ん魚板の音の乾きたり

2位「祖谷の郷」村上和義さん。歴史のある地、祖谷の景や人々の暮し振りを確りと写生している作品群に惹かれた。安易に固有名詞に頼らず表現している点も好感が持てた。

雉鳴いて山の暮しの動きだす

吊橋を潜る風花また空へ

3位「宮沢賢治と神の世界」大内マキ子さん。賢治童話と遠野の世界を気負いなく表現していて楽しい作品となった。前半の固有名詞が多いのが難点。

曲家の迷路めく土間蜘蛛の糸

「尾を高く」の穂苅照子さん、「万象俳句賞」受賞おめでと  
うございます。

## 選考所感

三屋 英俊

句が出来上がったらず見直す

沢辺 たけし

順位は、一句ごとの評価に二十句としてのテーマ性、構成、題名の納得性等を加味して判断、最終的には全体としての詩的共感性、独自性、通して読む時の滑らかさ等比較して決めた。前回同様題名について思ったことは、それ自身がコンセプトを持つ標題としての大切さ。

1位、「尾を高く」穂苅照子さん。場面の運び方と詩的な表現に共感。詩情を醸す味わい深い句が多い。構成を考えた跡が見える。句を通して前向きな生き方も感じられる。

はくれんの翼は雨を払ひけり

大空へ鼓動を合はせ揚雲雀

2位、「一日の春野」辺野喜宝来さん。沖縄の風土感がいい。二十句通して気持ちよく読める。知らない場所を丁寧に案内してもらっている様な快さを感じた。景色が見える。

浦曲より近づく雨や蒲葵の花

琉歌碑へうらうらうらと干瀬の波

3位、「城ありて」松田好子さん。共感句は多いのだが、どこの城下かがわかれば、全体の鑑賞域が広がり味わいも深まるはず。題名か一句を使って伝えたらよかったのでは。

あうあうと経読み鳥や藩主墓所

霊泉に触れて水馬動かざる

この題については、皆さんが普段やっていることだとは思いますが、選をしていて誤字や歴史的仮名遣いの間違いの多いのが気になり、改めて記しました。

1位は穂苅照子さんの「尾を高く」。最後に思い入れのつよい句もあるが、それ以外は日常の景を豊かに描いており、対象の捉え方に作者独特の感性が表れている。

雪吊に納まる松の眠りかな

啓蟄や紐締め直すスニーカー

2位は久保田富士子さんの「梅雨鴉」。この作品も日常での景を淡々と描いている。後半の「夫逝けり」の句からの変化も前半に伏線となる句があるため、作品のなかにおいては自然に感じられた。

やはらかに泳ぎし蛸蚪に水昏るる

梅雨鴉たたらを踏めり屋根の上

3位は松永博子さんの「京ことば」。「買初」の句から始まって、京都の四季を抒情的に描き出しており、好感を持ちましたが、一か所の歴史的仮名遣いの間違いが気になりました。

春浅し愛染王の札くすむ

立体曼茶羅へ春の日のとろり

## 「万象俳句賞」応募作品の一句

(江見悦子主宰選)

応募者27名の内、受賞者を除く24名の作品から、各一句を

紹介し、ここに敬意を表します。(応募順)

霜枯れの丘を掻き分け一輛車	竹澤竹里
あめんばう進むに脚を動かさず	入河大河
ペデイキュアの三社祭の足揃ふ	下嶽孝一
蕎麦を挽く白の片減り虎落笛	村上和義
点滴の三日目に入る春疾風	長谷川洋子
凍空をB29の揺るがせり	恒川清爾
畦道に忘れられたる蛇の衣	南雲秀子
吉野川水面を渡る花菜風	山本瑤子
旅籠屋の土間を往き来の親燕	小川明美
若竹や風に撓ひてまたもどる	杉田富美代
笹藪の奥より雉子のほろろかな	今越みち子
被爆樹に巣箱掛けあり修道院	丸本祥夫
夫逝けり眼鏡かけやる花の昼	久保田富士子

流木の滑らかな肌夏つばめ	一由久美子
褒められて二日続きの豆の飯	伊東文恵
春夕焼遊覧船を包みをしり	永田公春
涼しさや松の影濃き石畳	本多ひとみ
青空に燃えてはなやぐ立葵	鶴尾正江
ほうたるや闇夜を描く点と線	為永香月枝
青梅雨や馬の貌なるおしらさま	大内マキ子
神苑の桑の実ならばをろがみて	成瀬真紀子
不意に群れ一揆の里の秋あかね	松田好子
野鳥呑む空見納めの濁り鮎	山田睦夫
夏帽子押へて渡る隅田川	小池清晴

\*表記については応募作品のまま掲載しました。(編集部)

### 〈新会員のご紹介〉

8月の加入者です。

加藤浩子様	千葉県千葉市
町田すみれ様	奈良県奈良市

毎月25日発売  
定価1000円(税込)

# 月刊俳句界 2025年 10月号

特集

これからの俳句表現に  
新味を求めることは可能か？

◎これまでの俳句の新味 井上泰至  
◎俳句に新味を求めることは可能か？

大井恒行 山田耕司 マフソン 青眼  
拔井諒一 赤野四羽 佐藤文香  
小川楓子 浅川芳直

タラビア 俳句界NOW 井上康明

特集 **それぞれの家族詠**

○家族を詠むく作品とエッセイ

柴田佐知子 太田うさぎ 松本勇二

矢野玲奈 西川火尖

○一句鑑賞く心に残った家族詠

大石雄鬼 岩田由美 原朝子

金澤諒和

隔月連載



若手句集

を読む⑤

相子智恵 拔井諒一  
堀田季何 (司会) 井上泰至

【注目の一冊】山岸明子『俳人とその生涯』

連載陣 宮坂静生 青木亮人 坂口昌弘 八田九郎 ほか

「俳句界」投稿欄

一流選者10名！  
充実の投稿欄



株式会社 文学の森

お求めは… ●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2 田島ビル8F  
TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

最近の名句集を探る

山内節子『氣息』  
石田郷子『万の枝』  
高山れおな『百題稽古』

●巻頭三句  
今瀬剛一／和田華凜  
野口の理／関森勝夫  
すずき巴里／吉岡乱水

●今月の華

栗林明弘＋須川久

●俳句と短歌の10作数詠

若林哲哉＋久永草太

●FLOLO 私の漂流

撰津幸彦＋佐藤りえ

●師と弟子、弟子と師

恩田侑布子＋古田 秀

●四季吟詠選者競詠新作10句

鳥居真里子／佐怒賀直美  
鈴木しげを／村上軞彦

●新連載 俳句のレトリック  
橋本喜夫

片山由美子

特別作品40句

筑紫磐井 司会  
大西朋  
後藤章  
野崎海芋

●好評連載  
成瀬政博  
とりあえずの日々  
筑紫磐井  
俳壇観測

坂口昌弘  
青木亮人  
忘れ得ぬ俳人と秀句

●俳句の手触り、  
俳人の響き

大西朋  
井上泰至

●俳句の詩語  
イメージ辞典

藤村公洋  
俳句のつまみ

●神作研一  
てのひらの江戸

堀田季何  
諸家書架

石井隆司  
たもとほる

●俳句よもやま話  
二ノ宮一雄  
一望百里



2025年10月号

9月20日発売  
定価1100円(税込)

<https://www.tokyoshiki.co.jp/> 東京四季出版  
〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

## 子規と私(九)

細見綾子

私は、子規の俳句の中で、どれが一番好きかと言われたら、やつぱり(鶏頭の十四五本もありぬべし)、あの句がいいと思います。(鶏頭の十四五本もありぬべし)という句が私は好きです。それがよくわかるようになりまして。そんなもの、何でもないことじゃないかという人がいる。でも、子規は寝てて十四、五本鶏頭を見ている。きつと先の花じゃなくて、茎が見えてるんじゃないですか。鶏頭が十四、五本あるだろう。それがいかにも鶏頭そのものをよく表している。鶏頭というものは、一本一本、そんなにはあつと長くなって、そんなに美しいものじゃありませんですね。乱立して、短いやら長いのが一緒になって、子規が「墨汁一滴」に書いているような、ああいう鶏頭じゃないかと思えます。細長く花がちゅつちゅつと咲いて、それが茎を並べている。(鶏頭の十四五本もありぬべし)、その句が私、大好きなんです。いかにも歯切れがよくて、十四、五本はあるだろうなあ、と言いつつ切っているんじゃないですか。それが写生の良さ、私は鶏頭らしと思えます。

この句は、初めはそんなに良さがわからなかつたけども、いま、子規の句でどれを挙げるかつてもし問われたら、私、この句を書いて出そうと思う。自信があります。(いくたびも雪の深さを尋ねけり)という句もあります。子規は、雪のそばへ行かれないから、どのくらい降つただろうかなって、(いくたびも雪の深さを尋ねけり)、そ

れよりも、鶏頭の方がうんといと思うんです。明治二十七年の(唐黍に背中うたる、湯あみ哉)、この句も好きです。

(柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺)、これは、もう子規の代表句。でも、本を読んだら、これは法隆寺じゃなくてほかで食べて法隆寺にした、なんてことが書いてあつたけど、本当かどうか知らないんですけど、(柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺)、これもいいですね。あそこらへんの感じをよく出しています。

子規の食べたのは、御所柿っていう柿です。東京にはちよつとない、べたつと平べつたい柿で、ちよつと頭が尖んがつているような柿、あれが大和に多いのです。法隆寺にもとても多く、見事な柿です。(柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺)……。法隆寺の鐘が、がんと鳴つて、そこで柿を食べた。これも子規の句らしい。

(夏瘦せの骨にとどまる命かな)、これは少し露骨過ぎると私は思いますね。

(鶏頭のまだいとけなき野分かな)、この句は私、好きです。いとけないだから、あんまり大きくなってないで、ふらふらと風に揺られてる野分の中で、(鶏頭のまだいとけなき野分かな)……。

とにかく、子規は、空想より得たる句は、最美ならざれば最拙、空想だけで作つた句は、最も美しくならざれば、最拙、最も悪い。だから、空想で作ることを、いつでも排除しているわけです。実に即さないで、頭でだけ考えて俳句を作るといふことを、子規はいつでも排除していました。

(次号につづく)

「子規・写生―没後百年―」(沢木欣一編 角川書店より抄出)

『万葉集』にたずねる抒情の源流 ②⑥

橋本 清

今回から巻四に入ります。相聞三〇九首を収めた巻です。

君待つと 我が恋ひ居れば

我が屋戸の 簾動かし 秋の風吹く (四・四八八)

「わが君のお越しを待ち焦がれ続けていると、わが家の戸口の簾を動かし、秋の風が吹いて来た。」

額田王が天智天皇 (在位六六八―六七二) の訪れを待ち焦

がれて作った歌。作者は大海人皇子 (後の天武天皇) の寵愛を受け、後に兄の天智天皇に召されたとされている女性です。

しばらく訪れない天皇のことを恋しく思っていると、

戸口の簾の動く音がした。はっと一瞬、胸がときめいたけれど、簾を動かして入って来たのは風だけだった。期待したものがそこに無かったことを風がつかなく告げたのです。その風が秋の風だったから、空しさ寂しさはひとしお胸にしみたことでしょう。

風という、それ自体は目に見えない現象が何かの不在を身にしみて感じさせるところに、抒情のテーマの一つを見出すことができます。

采女の 袖吹き返す 明日香風

京を遠み いたづらに吹く

(二・五二)

「采女らの袖を吹き翻していた明日香の風。都が遠くに遷り、今は空しく吹いているよ。」

持統八年 (六九四)、都が飛鳥から藤原の宮に遷った後、志貴皇子 (天智天皇の皇子) が作った歌。

采女は朝廷に奉仕するため、若く見目の良い者が選ばれて貢進された地方豪族の子女。美しく華やいだ娘達の往来が全く途絶えた旧都の街路に佇み、空しく吹く風に身を委ねながら、虚脱感に似た寂しさを身にしみて感じているのです。

後世の例も挙げてみましょう。

人住まぬ不破の関屋の板さびし

荒れにし後はただ秋の風 (新古今一七・一五九九)

藤原良経 (一一六九―一二〇六) の歌です。「不破の関」は美濃にあった関所。東山道の要所を押さえる重要な関所でしたが、この歌よりはるか昔の七八九年に廃止されました。久しく番人も住まなくなつて荒廃し、ほとんど湮滅しかかっている関所の建物。そこを吹き抜ける秋風が寂寥感を一層深くします。この歌を踏まえ、芭蕉も一句を残しました。

秋風や藪も嶋も不破の関

(野ざらし紀行)

藪や畑になつてしまつた不破の関の跡を秋風が空しく吹き渡つて行くのです。



## 鳥の置きみやげ

札幌 杉山鈴子

私の庭は、草木雑草も含め植えた覚えの無いものが沢山芽吹きます。

ジャムの材料となったサクランボの木もそうです。品種は分からないのですが、実は成熟すると赤黒く、少し大き目で味がよく、生食は勿論のこと、ジャムも美味しく頂けます。桑の実も芽吹いたのですが、雄株のようで実は付きません。母が木の実の事をよく知っていたので、桑の実、山ぶどう、ハスカップ等のジャムを作った思い出があります。

鳥の腸を介して発芽したであろうサクランボの置きみやげは、毎年ご近所の楽しみの一つとなりました。

ギフトはギフトへというところでしようか？ 色々な豊かな命と繋がっているようです。

## 私の朝食

船橋 山口秀吉

私は実家が米屋であり、上京する20歳まで、朝食は米飯であった。しかしサラリーマン生活が長くなると、朝は簡単なパン食となった。

現在は一枚のトーストを四分割して、苺、ブルーベリー、ママレード、ピーナッツをそれぞれに塗って食べている。さて、ピーナッツはジャムか？ グーグルの見解では、ジャムは果物や野菜を材料とするので、私はジャムであるとしている。また、落花生は千葉県の名産であり、現在千葉県にお世話になり、お墓も千葉で買うことからその義理を果たしたい。

さて、千葉の食文化に、落花生を茹でて食べる方法がある。私も最初は戸惑ったが、70歳を過ぎ歯が弱くなり、食するようになった。皆様もぜひ。

## 人参ジャム

小松島 田上幸子

徳島県は全国3位の人参の産地で、収穫期には新聞に臨時作業員の募集が掛かるほどです。

先日、万福寺句会の後、奥様の吉美さんが巨大な袋に大量の人参を運んでこられた。生産者から頂いた規格外品とのこと。大きくて美味しそうな人参を、「好きなだけ持って帰りよ」と。その量にたじろぎつつ有難く頂きました。帰宅後知人にお裾分けしたり、茹でて冷凍保存をしたりしました。人参ジャムを作った句友は、小さい頃人参が苦手であったが、ジャムの人参は甘く美味しく、すぐに無くなってしまっただとか。彼女の一句「雨だれや春人参のジャムを焚く」。

作り方はミキサーにかけ砂糖と煮てレモン汁を落とすだけ。林檎を混ぜても美味とか。人参嫌いのお子様にもおすすめです。

## 梅仕事

柏 内田郁代

5月末、姑の十七回忌の法要のため家族で帰郷した。終了後、姪の運転で高千穂へ。折から、丸々とした青梅が沢山売られていて、梅の美しさと買えない口惜しさを抱いて戻った。

そのせいか珍しく娘が、高千穂の梅ほどではないけれど、立派な梅で梅シロップを作った。シロップを取った後の梅でジャムを作ることに。ジュースを取った後の梅は皺皺。そこから種を取るの大変な手間で、一日がかりでジャムが出来た。程よい甘さと、梅の香もしつかり残り上々の出来た。パンにもヨーグルトにもよく合い、家族揃って幸せな時を過ごすことが出来た。ジャムは瞬く間になくなってしまうが、シロップは今も大切に楽しんでいく。冷たい一口の美味しいこと！

## 苺ジャム

静岡 長谷川洋子

私は新潟県出身です。子供の時、両親

親は兼業農家で、母は苺を少し栽培していました。地域にあった駄菓子屋の店主が南方からの引揚げ者で、通称「ナンヨウ」と呼ばれていました。お菓子の他にパンや、夏にはかき氷も出す、子供に人気のお店でした。店番の奥さんのござっぱりとしたスカート姿に、外国の文化を感じ、私は憧れていました。

ある日その奥さんから「お母さん苺を作っているの？ ジャムを作りたいから苺を譲って欲しい」と伝えて欲しいと言われ、誇らしい気持ちになりました。母は苺を譲り、我が家でもしばらくジャムを作って楽しみました。ただ砂糖が多く少し硬かった記憶があります。それをきっかけに私もお菓子作りを楽しむようになりました。

## 梅ジャム

市川 奥澤よし江

実家の梅が今年によく出来た。青梅はジュースに、色づき始めたものは梅干用に選別し、それぞれに仕込む。ここでひと息入れてジャム作りに取りか

かる。完熟した落ち梅を拾い集め、へたを取り汚れを落とし水ですすぐ。水切りをし軽く拭き取ったものを耐熱皿へ移し、ほどよい柔らかさになるまでレンジで加熱する。冷めたら種を指で押し出す。果肉は鍋に取り火にかける。とろみがついたら火を止めはちみつを入れかき混ぜて出来上がり。ヨーグルトやパン、クリームチーズに添えるとその甘酸っぱさがたまらない。瓶詰めの梅ジャムを並べひとりほくそ笑む。庭に戻り梅の古木を仰ぐ。今年もまた梅の手仕事が一段落ついたと感謝を込めて報告する。甘い香りの中で何とも豊かな心持を味わう一日だった。

## 「万象ノオト」投稿募集

▽2月号「コンピニ」(10月末日締切)

▽3月号「リモコン」(11月末日締切)

▽長さ 本文 17字×19行以内

▽投稿先

〒417-0861 富士市広見東本町14-14

神田美穂子

# 北から南から

## 辺戸岬・みやらび句碑

沖縄

稲嶺有晃  
宮城 勉

夕月夜乙女の齒の波寄する 欣一 『沖縄吟遊集』

令和7年4月のふう句会吟行は、沖縄本島最北端辺戸岬に立つ欣一句碑を訪ねた。句会吟行レポート256号になる。

沢木欣一は、昭和43年夏、沖縄本島に滞在し、49年、句集『沖縄吟遊集』を編む。「みやらび句碑」は、55年8月、「風」初代沖縄支部長、新城太石を中心に建立された。へ月さして辺戸の海鳴り地にひびく、太石



太石の句碑は、国頭村辺戸名の森に、辺戸岬の欣一句碑へ向かい立つ。岬は沖縄創生神話の聖地「安須森」の辺にある。また岬の北端に、鹿児島県与論島に向かい「復帰の碑」が立つ。北緯27度が日本と沖縄の境界線だった。

今年(2025年)は戦後80年。沖縄は復帰53年を迎えた。欣一の風清明の野のはたて秋霖や安須森けぶる句碑の辺に

前田貴美子  
稲嶺 有晃

(稲嶺有晃 記)

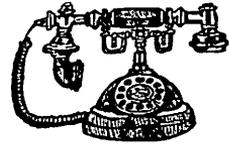
さいはての辺戸のあざみは白ばかり 欣一 『交響』  
辺戸岬まで来てとりし蘇鉄の実 綾子 『存問』  
「みやらび句碑」の除幕式に際して、欣一は乙女の波の白齒に秋の蝶(『往還』)とも詠んでいる。

二つの句は、琉歌の「謝敷板干瀬に打ちやり引く波の謝敷みやらびの目笑ひ齒ぐき」(謝敷節。歌意…謝敷の海岸の板のような岩瀬に、打ち寄せては引く波が真白に砕け散るさまは、謝敷の乙女たちの微笑んだ美しい真白い齒を思わせる)を踏まえている。欣一は、沖縄の風物に触れた体験を句集に編んでおり、琉歌に触れる機会も多くあったであろう。

琉歌の基本は、8・8・8・6の音律で、古くは王族・士族から平民に至るまで詠まれ、古典音楽や鳥唄として三線にのせて歌われる叙情歌である。1700年中期の恩納ナベ(女流で農民)の、思いを直情的に詠った琉歌を紹介する。「恩納岳あがた里が生まれ島もりもおしのけてくがたなさな」(歌意…恩納岳の向こう側に、恋人の生まれた村がある。この邪魔になる山をおしのけて、恋人の村をこちらに引き寄せたい)次の琉歌(恩納ナベ作)を皆さんで鑑賞してみてください。「恩納松下に禁止の碑の立ちゆす恋忍ぶまでの禁止やないさみ」

(宮城 勉 記)

# 万象作品



江見悦子選

○は佳句に選ばれました。

○唐桐や村往診の黒靴 那覇 辺野喜宝来

慰霊の日風は海へと移りけり  
母に遠く記憶の戦草いきれ

短夜や付箋の増ゆる中にゐて

十薬を干す裏町の獣医かな 金沢 井端久子

○いきいきと目玉の走る目高の子

万緑や空のリフトの上り下り

大茅の輪くぐれば青き風生まれ

田植して水の匂へる里となり 佐倉 鈴木隆久

吹き消して燐寸のほふ五月闇

沙羅咲くと来るよいつもの刃物研ぎ

○砲火いま噴くことなけれ夏の蝶

子つばめの声に口笛返したる 那珂川 高山ひさ子

山法師散る花びらの雀色

○グラタンのチーズばこぼ枇杷熟るる

片蔭に煙草くゆらす老大工

○枇杷の実のたわわや缺入れ直し 酒々井 小林あけみ

実桜や犬伸びやかにドッグラン

暮れ残る空へ泰山木の花

下馬碑立つ破れ寺の門柿若葉

○チャイム鳴る見なれし部屋の昼寝覚 東京 高野翠子

立ち止まる赤信号や今日は夏至  
くり返し遺句集を読む夜半の秋  
透かし見るグラスに揺るる冷し酒

新潟 榊原キヨ子

暑にたふる朝な朝なに梅干を  
梅漬くるレシピ緋く虫眼鏡

茄子の花二つ重なり雨兆す

○捨てがたき母のブラウス梅雨曇

悠々と山道登る青大将 札幌 石田 睦

巢を落ちし子鴉探す声響く

夏野原追ひかけつこの雀たち

青葉風音楽室よりホルンの音 島崎 洋

螢狩 あはき光の放物線

○海霧走る厚岸港をひと呑みに

捨て庭に六月の花咲き乱れ 杉山 和廣

万緑や森へ分け入る千歳川

炎天や少年坂を登り来る

麦の風棒をふりふり少年来 杉山 鈴子

夏の川水面切る石走る石

早苗田の日の入り時や鷺佇てる

廃屋を住処としたる蜘蛛の陣 札幌 園田鶴子

夏来るよさこいの地の弾けたる  
豌豆の巻鬚かたく結ばるる  
初夏の森鈴鳴らし行く遊歩道

竹重富子

立葵鳥居の前に列をなし

鬼罌粟の花びらめくる風かろし

墓仕舞の読経に和する瑠璃の声 田邊 政代

○月よりも高く爆ずるや大花火

美しき素足に真赤なベディキュアを

○マンホール押し上ぐるほど半夏雨 土門 一平

音を聴くヘッドホーンの汗みどろ

夕端居父の両すね細くなり

父の日の鰻の昼餉喜ばし 土門 一

片蔭を選んでたどる通院路

海風や手で押さへたるバナマ帽

サングラス隠せる瞳見ひらきて 船橋 明美

海開き毎年挑むダイエツト

星祭嫁ぎたる子へ願ひ事

雲霧あげ平野うるほす瀑布かな 新庄 曾野部礼子

道の辺のひとかたまりの夏薊

草むらの中に赤らむ蛇莓

○大杉を絡め取つたる藤の花 大江 安藤桂花

緑蔭や遊具に順番待ちの列

道の駅行き交ふ人に汗光る

仟鉢堂に淡きみあかし半夏生 仙台 富田洋子

水無月の松寄り添へる翁句碑

夏蝶来地下通学路のクレヨン画

木酢を畑にまいて冷酒酌む 新潟 齋藤 信

バス停のスマホの列へ夏燕

麦秋や鐘撞堂の千社札

葉桜や大きく白き石灯籠 佐藤幸示

眺めるる夏雲速き山の駅

椎若葉リード持つ人駆くる人 高塚先子

柿若葉稽古はうそをつかないと

梅雨兆す少し重たき半紙かな

古文書の紙の軽さや若楓 山田季聰

青やかに竹皮を脱ぎしなりゆく

絶壁の古道を洗ふ土用波

慈雨待てる露地のトマトの傷白く

草笛や兄より頬をふくらませ 渡辺志ま

○短夜の少女はすぐに深眠り

子燕の糞に紙敷く店の前 芳賀 稲川清子

半夏生門のまはりをとりかこみ ほ 柄作

宮大工汗をふきふき柄作

田より出て軽鴨親子道過る

○オスプレイ去りて鳶舞ふ梅雨晴間 鹿沼 渡辺利子

咲き分けて朝日集むるさつきかな

朝夕の花壇に水を半夏生 飯塚キミ

扱花や城壘に雨しきりなる 梅雨はげし 賽銭箱に猫丸く

城跡に祀る稲荷や樟若葉

郷土史を語る集ひや夏椿 佐野 木村君子

玄関の戸車直す凌霄花

玄関に若竹の影揺れにけり

無花果の葉陰に青し札所寺 仲山さよ子

緑さす板碑の仏うすれけり

青鬼灯ふくらみてをり雨上がり

山若葉日の斑のゆらぐいろは坂 仲山さよ子

由比ヶ浜沖に散らばるヨットの帆

長谷寺のゆるき階段蟬の声

来し方を語る神主夏木立 佐野 義本美智江

濃あぢさる社務所の脇にパッカー車

大天狗祀る社に江戸風鈴

我が丈を抜きて凜凜立葵 志木

汐見克彦

送電線つづく彼方や雲の峰

夜明けより給餌せはしき四十雀

土用入カレうどんの汁はぬる

森山洋之助

エアコンの故障直らぬ熱帯夜

浅草や浴衣に靴のエトランゼ

尾根径に控へ目に咲く山躑躅 新座

多田英治

せせらぎにハンカチ浸す著莪の花

声高の選挙カー上夏つばめ

悪口も供養のうちやビール足す 千葉

高田みや子

百歳を看取りし嫁や海芋咲く

滝音に歩み早むる獣道

雨を待つ田畑に雷の音ばかり 佐倉

新谷八郎

有り難いは母の口癖仏法僧

○列島の弧状のしなり立葵

夏稽古袴姿の高校生

有泉正夫

夏祭櫓の組み立て町内会

提灯を庫に納むる祭の子

印旛まで青田の波の連なりて 佐倉

杉田富美代

薰風やマリリンバひびく美術館

入梅や書展の墨は濃く淡く

茹であがる笹に笑顔のはじき豆

鈴木美根子

梅雨入やカステラ少し丸み帯び

短夜や寝つけぬ歌のリフレイン

青空にJALの字見えて袋掛

米田敏子

ごきぶりのあまりの速さ取りにがす

川岸の薄闇のなか初螢

近藤澄子

春落葉あまたとなりの公園に 船橋

近藤澄子

初夏の旅夫の遺影を胸に抱き

風鈴のやさしき音や昼下り

山口秀吉

○わが試歩のよちよち歩き初節句

新緑を見直してをりこの齡

リハビリのベランダ歩き三十分

山口秀吉

指示あふぐ線路工夫の炎天下 柏

鹿毛満子

産土へ朝夏草をかきわけて

○アイマスクして短夜の夢つなく

二人居の朝な夕なの麦茶かな

村田由美子

買物の夫の日課のアイスクリン

万緑や曾孫誕生メール来る

人に逢ふ如く新樹に近づきぬ

松戸

石川幸子

緑蔭や居心地の良き古ベンチ

炎昼の電線に來し尾長かな

水鉄砲に歓声上がる保育園

菊岡緋路

首着 太極拳の公園に

半夏生橋の下にも群生し

蕺菜の覆ふ古塚風化して

寿多映子

パンを焼く香の漂へる薄暑かな

焰立つ水掛け不動梅雨曇

たんぽぽに囲まれ笑まふ道祖神

渡部洋子

垣根越え咲き上りたる立葵

朝寝して忙しきひと日水中花

○青苔の雫に打たれ竹柄杓

市川

奥澤よし江

遠き日の昼顔今も浜の道

再会は空港ロビーパナマ帽

軒下の宙にも育つ西瓜かな

東京

安藤美酒々

七夕や漆黒の夜の美星町

ひせいこう

○バス停のベンチ焦げつく炎暑かな

大神輿肩瘤なづる男たち

東京

大場八朗

三社祭輿の先棒ゆづらるる

花の王ばらの茨の多すぎる

青葉風乗り降り二人峡の駅

昼顔を数へて待てり峡のバス

サングラスのをとこ銀座へナイキ履き

梅雨の朝少し涼しくボンジヨルノ

齊藤孝夫

夏帽子深く被るや影の顔

校庭の打水辿るソーラン節

紫陽花を傘さし眺む園児かな

鶴田智美

父の日や夫に好物豆大福

長き留守どくだみばかり生き生きと

水まきの下で小踊り孫二人

鶴田智美

油照病院帰りの夫を待つ

寝て覚めて夜のひとりやアイス食ぶ

草取りを止めてメールの返信す

中澤桃子

過去の句に手を加へたり戻り梅雨

すれ違ふオーデコロンの仄かな香

○下戸なればもう一杯と一夜酒

長谷川信也

草笛の高音遠のく昭和歌

バンガローに寝付かれぬ吾星の下

東京 長谷川はるみ

珈琲の香り増したる梅雨じめり

海猫の巢に卵の殻の残りたる

海猫の人の姿に鳴き止まず

空梅雨や去年には猫の居し窓辺

五七五と指折る夫やつゆの明

猫抱けば互ひに湿る梅雨の肌

朝一番胡瓜一本まるかじり

ウクライナ募金に立てり緑さす

夏の朝あいさつ交はず散歩道

まつすぐに青空めざす竹の秋

天摩するメタセコイアや夏来る

細き竹すつくと伸びて夏来る

武家屋敷に解体新書見る炎暑

夏座敷制服の背のみな違ひ

桑の実や賢治の愛でし石いろいろ

人声を離れ水音沙羅の花

木洩れ日に風の涼しさ切通し

出港の航跡曲がり大南風

菖蒲咲く池を良き風吹き抜くる

平子 甲奈

前川 昇

宮崎 正義

荒井 仁

高尾 早弓

南場 雅子

あぢさゝるや色づく青の川の辺に

届きたるふるさと便のメロンの香

浮き立つや緑の海に近衛邸

子燕の産毛さらさら巢を出づる

白南風やアルプス連山あらはるる

風鈴売天秤棒の銀座かな

松明や神輿列成し川に入る

「支那の夜」唄ひし母や夜の秋

〇ぞろぞろと日傘の男子高校生

幾何学の宇宙広がるパナマ帽

真つ白き道の向かうは夏の海

葱坊主めける野蒜の小さき花

新緑に雨のシャワーが降り注ぐ

北国へ二度目の新緑ありがたく

梅雨晴間庭師の鋏潔し

万緑の古刹に眠る友に御酒

鎌倉路一筋入れば夏鶯

打水の小さき虹立つ朝の庭

木下閣抜けて眩しき小径かな

病葉の散りて静かな夕べかな

府中 竹村 晃子

日野 松原 悦子

盛野山 松井 宣夫

青梅 横井 一美

横浜 大駒 泰子

岡 元枝

小糠雨隣家をおほふ栗の花 横浜 加藤和子

数を増す萱草庭を明るうす

紅梅の実の熟れ紅く地を染むる

汗拭ひしばし足止む溪の音

谷風や白紫陽花を揺らし過ぐ

水引草一本咲けり不動堂

四温かな洗濯物を日にかざし

天神に絵馬のあふるる梅日和

紅梅や屋台の暖簾準備中

久々の髪床行きや薄暑来る

葉桜に見え隠れする鳥一羽

卯波立つ微かに見ゆる沖ノ島

ペランダの朝顔の蔓からみあふ 川崎

涼しさやりハビリ終へし歩の軽き

工場の跡地盛りの夾竹桃

山滴る川たうたうと沈下橋 茅ヶ崎

○夫も犬も墓に納めし夏の空

蚊を打つて血をわけし腕さすりけり

露の香のどさりと届く三和土かな 伊勢原

風なづる水の匂ひの植田かな

山本カツ子

久保田富士子

横山ユキ子

長野高朋

柴田雅春

坂本具子

雨後の葉へ銀の筋跡蝸牛

○天牛の髭ぴんと張る夜の網戸 松田

湧水池水輪ひろぐるあめんぼう

レストランの小さき句会や梅雨半ば

遥拝や結界越ゆる夏の草 静岡 飯田優子

参道に帽子追ひ掛く梅雨の晴

海南風撫づる秋葉の御籤かな

○流れゆく雲の千態夏きざす 伊東文恵

墨色を放ちとんぼう草を出づ

夏旺ん狛犬の尾のぴんと跳ね 海野俊彦

灯籠にがんと動かぬ青蛙

夢破る耳元の蚊の騒々し

風薫る湖の水面を雲流る 杉田義則

夏の嶺ソールの硬き靴を買ふ

夏料理妻の手垢のレシピ集

○緑蔭に独楽と十手や蚤の市 杉山千鶴子

捨てし尾の跳ぬる間を蜥蜴消ゆ

工事場の猛暑に絡む音数多

盆提灯彩り添ふる山水画 杉山巳代

黴の香や考の書棚の山頭火

大南風孕む紫幕の如來かな  
梅雨晴や寺の薨の銀に

静岡 高井明子

梅雨晴間堰落つる音とめどなき  
時鳥寺の背山へ飮せり  
静岡 永田公香

十一の形代に名を婆書きぬ  
行水の赤児ぶくぶく百面相  
揺蚊をわいわい虫と吾子名付け

高橋一夫

○蚤の路さはさはと鳴る小判草  
手土産はルビーのごときさくらんぼ  
野崎浩子  
サンガラス口元だけがよく動く

日盛や雀の群れは砂を浴び  
松落葉積む特攻の艇庫かな  
一服や瀬音にまじる河鹿笛

田中秀幸

願かけの石を磨けり梅雨の晴  
峰雲の高さに立てり秋葉山  
長谷川洋子  
水馬の水馬突き進みをり

叙勲受け冷し中華を妻と食ぶ  
玉砂利を進み受勲の風待月  
夏祭 出店の 主会津弁

筑地裕子

○不動堂覗く鼻先蜘蛛の糸  
野面積みの石の尖りや草いきれ  
松永博子  
実桜や雨の雫を衣とし

蛇銜へ鴉飛び立つ小昼時  
雨あとの庭の芍薬紅の濃き  
舟唄に始むる神事風涼し

内藤允昭

夕立や熱き地面の匂ひして  
やはらかき櫂の風と昼寝かな  
矢野喜久江  
夕蟬やつまんで土にそつと置き

五月雨にてる坊主揺れ通し  
夏座敷柱時計のボンと鳴る  
知らぬ間に空き家となりぬ夏落葉

中澤祐一

湧水の静寂すべる川蜻蛉  
水門をしづかに上る青葉潮  
小梁洋子  
鬼百合のぬきん出て咲く朱さかな

駄菓子屋の葎簀の先の子の世界  
白玉の如き蒼や山芍薬

墓におつと尻もち石剝ぐ子  
振花の揺るる木陰に夫婦塚  
掛川 鈴木美由紀

だるま大師の拳突き出す炎暑かな  
産土の朽ちし鳥居や花櫛

川崎

鈴木裕一

土手沿ひを茶色に染めて栗の花  
指の先曲げて捻つて袋掛

金沢

上野富貴子

まづまづの検査の結果初鱈  
逃しやる夏蝶の空真青なる

金沢

北野陽子

まだ残る抜歯の麻酔梅の雨  
夏見舞会ひたき人に会へし時

金沢

新出祐子

願ひごと七夕竹の大橋に  
増えてゆく灯籠流し並びをり

金沢

菅原雅子

もらひくる日向のトマトどつしりと  
老いし手に光る指輪や夏祭

金沢

菅原雅子

○演目に反戦歌ありパリー祭  
草笛や老人会の大取りに

金沢

田上ナツ子

ままごとのお椀あふるる小判草  
海見ゆる村の夕ぐれ青田風

金沢

廣田宏美

彼方此方と草刈られある氷室かな

盆近き仏具みがきや連子窓

夕虹や三十年みととせ続く会閉づる

金沢

松田好子

禅寺の静寂をとほる青嵐

朝涼や坐禅の坐蒲のならぶ堂

○いななきや厩に並ぶ扇風機

宮崎惠美

夏至の朝馬柵に顔寄せサラブレッド

背丈ほどの青蘆原や水の音

松落葉印半纏黙黙と

かほく

能任康子

更衣まだ片付かぬ箆笥かな

初夏の庭木の生き生きとゆさゆさと

すててこの爺急ぎ足夕日差す

白山

朝倉みゆき

夕さりの庭に打水祖母偲ぶ

宅急便土佐から届くなまり節

夏蓬黙々と刈る母なりき

鶴尾正江

咲きのぼる何処が正面立葵

御来光拜む我が影登山帽

墨垂るる和紙へ一閃青嵐

敦賀

川口和代

宇宙食の鯖缶うまし三尺寝

毛虫這ふ猫のしつぽの顔へたり

プランターの土盛り上がる夏はじめ  
林 早苗

モラエスの墓に供花あり夏の蝶  
山本晴美

紫陽花の色変はりゆく昨日今日  
山本瑤子

○オリブの旗を船首に夏の旅  
山本瑤子

誕生 日祝ふ窓辺に夏の蝶  
小松島 田上幸子

草に染む山羊の顎ひげ風蕉る  
松山 入河大河

眼前の夏野駆けたし車椅子  
松山 入河大河

スポーツ誌見る片蔭の素振りかな  
福岡 園田清子

懐かしき物のひとつの天瓜粉  
福岡 園田清子

飾り山博多の街は夏本番  
鶴田輝代

○みゼロの日や仙人掌の紅極め  
鶴田輝代

庭仕事終へて微睡むハンモック  
門川 請関ゆかり

我が愛車磨き上げたり梅雨晴間  
山口孝治

初夏のトラック連なる通勤路  
山口孝治

○沖繩忌無告の民の声を聞け  
那覇 稲嶺有晃

雨音の遠くなりたる昼寝覚  
大城末治

守宮鳴く久慶門を帰りけり  
山原の森を揺すれり青嵐  
高嶺谷道

○相統の相談アイスティーぬるく  
高嶺谷道

梔子の香を来てひとり昇降機  
宜野 宜野 頭

○夏ぐれや暮しに島の季語ひろふ  
濃く黒く名城烏城梅雨夕焼  
森尾 舞

張り扇発止と入りて初夏の雷  
森尾 舞

# 私のこの一句

新巻の値札見せ消ち御徒町 大木 茂

JR上野駅から御徒町駅までの山手線沿線には、多くの商店が犇めき合うアメ横商店街がある。年末は、一日に50万人を越すと言われる買物客でこった返す。店先には、海産物が山積にされ、威勢よい掛け声で売られる。新巻鮭は、軒に吊られるものもあり、売子は首をすくめて出入りする。アメ横では、多くの商品に見せ消ちの値札が付いている。殊に、新巻鮭は、赤や黒の太文字で何度も書き替えられる。若い頃、近くに職場があったことから、売子の大声や雑多な雰囲気は懐かしく、今でも年末や上京の折には必ず立ち寄っている。

紫陽花を揺らし一分停車場 織田みさゑ

15年前まで会社勤めをしておりました。通勤電車で揺られること30分。何とはなしに過ぎ行く車窓からの風景を眺めて過ごすのが常でした。雨天の車内は不快感が深いがち。ただ梅雨の時期だけはささやかな楽しみがありました。途中、切通しの崖際に紫陽花のなだれ咲く場所がありました。雨に濡れると色が濃く感じられ、雨に打たれて揺れるさまが紫や青のグラデーシヨンのような色合いをいっそう移ろわせます。

切通しを抜けると乗換駅。1分間の停車で紫陽花の余韻を楽しみます。梅雨の時期になると思い出される光景です。

沙羅の花一輪ずつの憂ひあり 佐藤 哲

四男坊が死んだ。暑さまっ盛りの大阪の病院だ。北大理学部を卒業して北海道の企業に就職した。

理想と現実のままならず意を決して大阪へ。そこで恋をした。めんこい少女を得、二人は新婚旅行の地、北海道へ。当時父は増毛の地で校長をしていた。二人が遊んだ暑寒別岳はかっこうの遊び場だった。白い花はさらさらと山を色どりの実は庭園樹として帰路、江別の地に植えられた。いま沙羅の花は一輪ずつ咲きほこる。

炎天や大工怒鳴りて教へをり 今越みち子

暑い日の昼下がりに、突然の「バカヤロー」に驚いた。前の新築中の二階からだ。「ああすればこうなる、こうなればあーなる。そんな事分らんか」と怒鳴る。大声なので響き渡る。その後も言葉は聞き取れないが怒鳴り声が続く。いい加減に許して上げてと思っていたら、急に「分かったか、な」と優しい声が聞こえ、私もほっとした。

この句は大西八洲雄先生の特選になり賞を頂いた。中山純子先生が横から「その額は先生が手作りなさった物よ」と言われ、益々感激した。

# 万象作品の佳句

江見悦子

唐桐や 村往診の 黒靴 那爾 辺野喜宝来

「とうぎり」は緋桐とも言い、夏の季語。「沖繩歳時記」には沖繩本島北部などによく見られる、とある。葉が桐に似て、枝先に円錐状に緋色の筒状の花をつける。

この句の舞台は都会を離れた場所、往診の医者 of 乗り物はバイクか自転車か、籠にはふくれた黒靴。具体的にモノをつかんでモノに語らせる即物具象の句。靴の黒と唐桐の緋色の対比も南国的で鮮やか。

いきいきと目玉の走る目高の子 金沢 井端久子

「目玉の走る」が秀逸。生まれたばかりの目高の子が元氣よく泳いでいる様を「目玉の走る」と表現した。透き通った目高の子の黒い目玉はまさに命の象徴。他のことは何一つ言っていないが、目高の子の命溢れる姿が文句なく楽しい。

砲火いま噴くことなけれ夏の蝶 佐倉 鈴木隆久

ウクライナ、ガザに浴びせられている砲火からは、遠く隔たった平和な日本。「なけれ」は形容詞「なし」の已然形でいわゆる已然形止め、強調の意味を持つ。なくて欲しい、と意識したい。眼前に舞い、生を謳歌している夏の蝶こそ平和の象徴である。

グラタンのチーズぽこぼこ枇杷熟るる 那爾川 高山ひさ子

「チーズぽこぼこ」に、オープンで仕上がり周辺のグラタン皿が目に見える。少し焦げて何とも美味しそう。ちょうど夕日の色をした枇杷のようにも見える。取合せの「枇杷熟るる」が暗喩にも思われ、明るく楽しい句となった。

枇杷の実のたわわや鉄入れ直し 酒々井 小林あけみ

たわわに実った枇杷を枝ごと切ろうと鉄を入れたがうまくいかない。もう一度鉄を入れ直した、という何という事のない句だが、これも作者にとっては心に残ったことの一つ。枇杷の実は綺麗に洗われて花瓶に活けられたことだろう。

チャイム鳴る見なれし部屋 昼寝覚 東京 高野翠子

目覚まし時計のチャイムだろうか、その音に驚いて昼寝から覚めた時の感覚を詠んだ。ほんやりした頭であたりを見回してみれば、住み慣れたいつもの部屋だ。目が覚めたばかりの一瞬間の面白さがある。

捨てがたき母のブラウス梅雨曇 新潟 榊原キヨ子

「母のブラウス」は母の着ていたブラウスなのか、母が作ってくれたブラウスなのか、両方考えられるが、後者と取ってみた。作者の娘時代に、お母様が丁寧に縫ってくれた記念のブラウスだ。どんよりとした梅雨曇の日に、鮮やかな色と柄のブラウスを拵げて見たものやほり捨てられない。断捨離も難しいが、心にかかるものは捨てられないものだ。

マンホール押し上げるほど半夏雨 札幌 土門 一平

季語「半夏雨」は「半夏生」の傍題。「半夏生」は七十二

候の一つで、半夏草（烏杓柄）が生え始める頃のこと。陽曆では7月2日頃、この日の雨が「半夏雨」で、降れば大雨が続くとされている。

作者はマンホールを押し上げる大雨を目の当りにしたのだろう。所を選ばないゲリラ豪雨が札幌にもやって来たのだ。現場を見た驚きを詠んで実感のある句。

オスブレイ去りて鷺舞ふ梅雨晴間 鹿沼 渡辺利子

米軍の垂直離着陸輸送機オスブレイが沖縄県普天間飛行場に飛来したのは2012年、墜落事故を起こし安全性に問題があると指摘される中で飛び続けている。

梅雨の晴間の青空を飛んでいたオスブレイが見えなくなり、鷺が悠然と舞い始めた。オスブレイは猛禽類の「ミサゴ」のこと。鷺の舞う空は平和の証である。社会性を感じさせる句。

青苔の雫に打たれ竹柄杓 市川 奥澤よし江

神社の手水鉢か、茶庭の蹲いか、石の表面を覆った青苔の雫が下に置かれた竹の柄杓に滴っている。かすかな音も感じられ、苔の青と柄杓の青が瑞々しい。視覚と聴覚で捉えた静かな一場面を詠んだ。

バス停のベンチ焦げつく炎暑かな 東京 安藤美酒々

今年の夏の暑さは異常で、まさに炎暑という季語が似つかわしかった。バス停の木製のベンチが太陽の熱で焦げつくよう、と実感を詠んだ。

ぞろぞろと日傘の男子高校生 鷺山 松井宣夫

最近ほ男性も日傘を使う。夏の日焼けは男の魅力の一つ、

とサロンに通う時代はどこに行つたのか。ぞろぞろと日傘の一団が通つて行く。みれば男子高校生、驚き面白がつている作者。日傘は蝙蝠傘ではなく、れっきとした日傘だったそうだ。現代の風俗を言い留めた句。

夫も犬も墓に納めし夏の空 茅ヶ崎 久保田富士子

一読、胸を衝かれた。ご主人を亡くされ、愛犬を亡くされ、代えがたい存在を納骨した日、空はあくまで晴れ渡っている。辛さ、哀しみがすぐに癒えることはないが、作者は明日を思い、はるかに夏の空を仰いでいる。季語の力を感じた。

蟹の道さはさはと鳴る小判草 静岡 永田公香

「蟹の道」は漁村から海へと続く道。漁師やその家族が毎日通る道だ。茎の先に小判形の穂を垂らし、熟すと黄褐色に変わる小判草の道。通るたびにさわさわと音を立てる。今は漁期なのか、男たちは海へ出かけ、年寄りと女と子供が村を守っている。ドラマが生まれるような静かな情景である。

不動堂覗く鼻先蜘蛛の糸 静岡 松永博子

古い不動堂は、誰でもが覗きたくなる場所なのかもしれない。正面の格子から堂内を覗いてみると、鼻の先を蜘蛛の糸にくすぐられた。おかしみのある句。

夏ぐれや暮しに島の季語ひろふ 宜野湾 宜野 顕

「夏ぐれ」は、沖縄地方で夏のわか雨をいう。この季語もそうだが、沖縄には琉球時代からの自然、伝統、文化を背景にした魅力的な季語が多い。作者は毎日の生活の中で、沖縄の風土を大切にしながら句作を楽しんでいる。

# 新中央句会報（7月例会）

令和7年7月27日（日）東京文化会館

（出席23名）

## 江見 悦子 主宰選

酷暑かな硝子に映る背の曲り	榎本文代
干梅の匂ひ夜風に濃くなれり	内田郁代
水無月や街かき乱すざんざ降り	大久保 進
海の日空の青きや雲溶けて	桔梗 純
てらてらと灼くるポストに投函す	久留島規子
はんなりと手許煽ぐや京扇子	安藤美酒々
干蝮箱に巻きある大暑かな	榎本文代
緑蔭のテラス恋人たちの手話	中村千久
バスの来て閉ぢる日傘の骨の音	一由久美子
蓮の葉に日差しの重き大暑かな	一由久美子
しやわしやわとG線上の蟬しぐれ	大久保 進
呼び鈴にまづ犬の声お中元	久保村淑子

④ 呼び鈴にまづ犬の声お中元 久保村淑子

呼び鈴が鳴ると、真っ先に犬の吠え声をして「お届け物です」と宅配の声。「お中元」が届く季節である。「お中元」は秋の季語。年に3回巡ってくる中国の佳節の一つで、半年の無事を祝い盃蘭盆の行事をする。今一般的にお中元と言えば、

7月から立秋の頃までにお世話になった人々に贈り物をする習慣のことも指す。その風習は明治になってからのものであるらしい。季語の「お中元」が面白く、俳諧味のある句となつた。

海の日空の青きや雲溶けて 桔梗 純

季語は「海の日」で、7月の第三月曜日。平成8年（1996）から新しく国民の祝日となった。ちょうど夏休みの始まりとも重なり、日常から解放たれる開放感がある日。この句、「雲溶けて」が良い。仰いだ雲の峰が崩れ、夏の輝く青空にふんわりと広がる優しい雲を想像した。海へ、山へ、夏の自然を満喫する「海の日」にふさわしい。

てらてらと灼くるポストに投函す 久留島規子

真夏の太陽の直射熱で、灼けるような熱さをもった真つ赤なポストを「てらてら」と擬態語で表現した。ポストの光った表は手を触れると驚くほど熱い。実感のある、炎天下の街の一光景である。

しやわしやわとG線上の蟬しぐれ 大久保 進

沢山の蟬が鳴き立てる様が「蟬しぐれ」。「しやわしやわ」という擬音語に納得した。「G線上の」とあるのは、バッハ作曲の管弦楽組曲の第2曲をバイオリンリストが編曲した「G線上のアリア」から。誰でもが聞いたことのあるメロデーだろう。「G線」とは弦の中で一番太く最低音を奏する4弦のこと。蟬しぐれに包まれ、その場と一体になっている作者。

聴覚に訴えた、表現の工夫に満ちた句である。

中村 千久 選

- 崖下を彩るものに著莪の花 内田郁代  
 干梅の匂ひ夜風に濃くなれり 内田郁代  
 蟬時雨鴉陣取る水飲み場 小池清晴  
 はんなりと手許煽ぐや京扇子 安藤美酒々  
 水ざぶと籠一杯のトマトかな 砂地宏子  
 炎天やソフトクリーム肘へ肘へ 加賀葉子  
 琉金の焰ゆらめく我鬼忌かな 三屋英俊  
 ビール手にラップの液にのまれゆく 鹿毛満子  
 レバニラ炒め友と分け合ふ極暑かな 安藤美酒々  
 一雨の来さうな気配西瓜切る 星野信子  
 襟元に鎖骨のくほみ夏旺ん 一由久美子  
 蓮の葉に日差しの重き大暑かな 一由久美子

- ④ 蓮の葉に日差しの重き大暑かな 一由久美子  
 選者3人が揃って取った句。季重なりではないか、という  
 声があったが、「かな止め」のこれは「大暑」の句。見事に  
 咲いた蓮の花とその葉に降り注ぐ、殊更に暑いこの夏の、し  
 かも大暑の日差しを「重き」と捉えた感覚が瑞々しかった。  
 はんなりと手許煽ぐや京扇子 安藤美酒々  
 「はんなり」は、上品な明るさを言ふ上方の言葉、殊に京

ことばなので、掲句が詠む職人による伝統工芸品の「京扇子」を使う仕草によく合っている。和装の女性が小振りの扇子で風を送っている。「手許仰ぐや」が奥ゆかしい風情を伝えている。

一雨の来さうな気配西瓜切る 星野信子  
 上五中七の夕立が来そうな気配と、下五の「西瓜切る」は一見して何の関係もないものだが、夏の午後の一餉がよく捉えられている。「二物衝撃」、最近の言葉で言うなら「あるある感」といったものか。

榎本 文代 選

- 陶椅子に遠富士の態ゆふすずみ 加賀葉子  
 乱れたるぎぼしに風の形かな 江見悦子  
 升目描きの若冲の象目の涼し 一由久美子  
 干梅の匂ひ夜風に濃くなれり 内田郁代  
 婚禮の写真回して水羊羹 桔梗 純  
 露地に風羅の背に扇紋 三屋英俊  
 閉園の遊具の軋み大夕焼 鹿毛満子  
 星涼しワイングラスに満たす赤 星野信子  
 涼しさや帯締め白き貝の口 江見悦子  
 サックスの生演奏や施餓鬼寺 南雲秀子  
 赤松の風籐椅子へ下り来たる 江見悦子  
 蓮の葉に日差しの重き大暑かな 一由久美子

④蓮の葉に日差しの重き大暑かな 一由久美子  
「大暑」は二十四節季のひとつで、名実ともに夏の絶頂期となる。池を埋め尽くしている蓮の葉。重なり合う大きな葉に容赦なく照りつける夏の太陽。その日差しを「重き」と捉えた。威圧するような夏の日の強さである。

干梅の匂ひ夜風に濃くなれり 内田郁代  
塩漬けた梅を天日に干して梅干を作る。今年は晴天に恵まれ、皺しわになった干梅がよく匂う。「夜風に濃くなれり」が満足のゆく出来上がりと思わせる。

婚礼の写真回して水羊羹 桔梗 純  
結婚式の写真を見ながら話の弾んでいるひととき。頃合いを見計らってお茶とお菓子が出された。「水羊羹」の瑞々しさは、夏のひと時をなつかしく落ち着いた気分にかけてくれる。

今後の新中央句会の予定

▽10月例会は、全国俳句大会前日のため中止します。

▽11月23日(日) 東京文化会館 小会議室 13時より

### 俳句カレンダー掲載句自註

令和7年版俳人協会「俳句カレンダー」に掲載された句と作者による自註を順次ご紹介いたしました。

眼帯のはづれし夫へむかへ飯 (十月) 江見悦子

零余子ひかこはぬかごとくも言い、自然薯・長薯・ツクネイモなどの葉のつけ根に生ずる珠芽のこと、と歳時記にあります。

かつて吟行によく参加していた時代、零余子の蔓を見かけると、皆で面白がつて引つ張つて摘んだものでした。故内海良太名譽主宰の句に「むかへ蔓力まかせに引く女」があります。眼前に見たものを、すかさずひよいと詠んだ良太句の自在さには驚きました。

さてこの句、白内障の手術を終えた夫の眼帯がようやく外れ、その晩は頂いたばかりの零余子をたっぷり入れた零余子飯を炊いた、という何という事もない句です。戦前のソウルで生まれた夫が、京都の山村に引き揚げてからは零余子飯をよく食べた、その時話していたことが心に残っています。

「方丈記」に次の一節があります。

或は茅花を抜き、岩梨をとり、零余子をもり、芹をつむ。

「岩梨」はこけもも、「もり」はもぎ取り、の意味です。京都の郊外日野に隠棲した鴨長明が「心をなぐさむる」こととして挙げています。

野山の産物を糧としていた、昔の日本の質素な暮らしにつながる零余子飯、その素朴な味を年に一回は味わうようになりました。



## ルビーの小函 (10月号)



「同人作品」「万象作品」に掲載された漢字表記でルビを振らなかったものの中から、読みにてこずりそうなものを拾ってあります。作品鑑賞の参考にしてください。太字は季語ですから歳時記で確かめてください。読みは現代仮名遣いにしてあります。

(編集部・校正担当)

- |                  |                  |
|------------------|------------------|
| 7 臍(ほぞ)          | 40 渡舟(としゅう)      |
| 8 臥所(ふしど)        | 鳩(かいつぶり)         |
| 12 黠(あうら)        | 41 涅槃西風(ねはんにし)   |
| 妣(はは) *亡母のこと     | 42 浦曲(うらわ)       |
| 13 虎口(こぐち)       | 蒲葵の花(ほきはな)       |
| 14 三鬲嶺(みかもね)     | 干瀬(ひし)           |
| 15 花縮砂(はなしゆくしゃ)  | 浜独活(はまうど)        |
| 17 抽んづる(ぬきんづる)   | 43 料峭(りょうしょう)    |
| 19 椰(なぎ)         | 葭戸(しとみど)         |
| 蛭(あま)            | 格天井(ごうてんじょう)     |
| 20 瓔珞(ようらく)      | 57 燐寸(マツチ)       |
| 22 夏安居(げあんご)     | 煙草(タバコ)          |
| 23 灸花(やいとばな)     | 58 海霧(じり)        |
| 背(そびら)           | 厚岸(あつけし) *北海道の地名 |
| 鳳蝶(あげはちょう)       | 59 木酢(もくさく)      |
| 24 石斛の花(せっこくのはな) | 60 海芋(かいう)       |
| 溶岩(ラバ)           | 61 苜蓿(うまごやし)     |
| 楊梅(やまもも)         | 蕺菜(どくだみ)         |
| 26 仙人掌(サボテン)     | 62 海猫(ごめ・うみねこ)   |
| 27 毀つ(こぼつ)       | 御酒(みき)           |
| 羅(うすもの)          | 62 三和土(たたき)      |
| 28 項(うなじ)        | 天牛(かみきり)         |
| 祖谷(いや) *徳島県の地名   | 考(こう) *亡父のこと     |
| 29 四葩(よひら)       | 64 銀(しろがね)       |
| 神座(かみくら)         | 揺蚊(ゆずりか)         |
| 耕耘機(こううんき)       | 銜へ(くわえ)          |
| 30 夕星(ゆうづつ)      | 水馬(あめんぼ)         |
| 殿(しんがり)          | 65 彼方此方(あちこち)    |
| 殺めて(あやめて)        | 坐蒲(ざふ)           |
| 32 呂律(ろれつ)       | 馬欄(ませ)           |
| 37 抽斗(ひきだし)      | 頭へたり(ふるえたり)      |
|                  | 66 微睡む(まどろむ)     |

# 北 南 西 東

## 消息等

江見悦子主宰、小林愛子名誉顧問の句

「くぢら」 8月号に

矢車菊ま青フアラオの棺の上 悦子

「初蝶」 8月号に

幼子の最初の一步春の雲 悦子

「しろはえ」 8月号に

教卓にカルミア一枝聖五月 悦子

樹下の日を裏返したり黒揚羽 愛子

「伊吹嶺」 8月号「現代俳句評」で、奥山

ひろ子氏が主宰の「万象の窓」に触れて

戦災誌の束や三月十日来る

昭和二十年三月十日、東京はアメリカに

よる大空襲に見舞われた。それから八十年、

作者は江東区にある「東京大空襲・戦災資

料センター」を訪ねられた。「万象」四月

号の氏の随筆欄「万象の窓」には、当時学

生であったこの両親が被災されたことや、セ

ンターを訪れてご覧になった、アメリカ軍

が撮影した航空写真に驚かれたことなどが

つづられている。「戦災誌の束や」に民間

人が犠牲となった戦争の歴史があったとい

う史実の重みと、伝えていかなければなら

ないという思いが深く感じられる。

石川、富山支部で「水鏡句会」開催

昨年、中山純子師没後10年を節目に支部

で毎年続けてきた中山純子忌に幕を引いた。

今年からは先生のご命日（7月28日）近く

に、純子先生を偲ぶ句会を開催することに

した。先生の最終句集「水鏡」から名を取

り「水鏡句会」とした。連日の猛暑の中、

13名が集い、先生の思い出を語りながらの

和気あいあいの句会となった。（中條睦子）

純子忌の近し大暑の木の影 成瀬真紀子

溶けそうな影を引きずる炎暑かな 石川純子

短冊の師の文字涼し寺座敷 高田民子

長年「万象」誌の印刷を手がけて下さった

多田英治氏の奥様、節子さんの快挙、「俳

句四季」8月号「季詠四吟 東京」で宮田

勝氏の特選に

春風は幸せだけを乗せて来る 多田節子

## 特選評

細見綾子句集を愛読する作者であらう。

綾子の（チューリップ喜びだけをもつてあ

る）（桃は八重）を口ずさむときに、ふっ

と生まれた句でなかるうか。春には温和な

風だけでなく、疾風も吹きさすさぶが、「春風」

は騒蕩たるおだやかな風をいう。温かくの

どかなそよ風である「幸せだけを乗せて来

る」には、自らの老いとの長く辛い葛藤の

末に生まれた。老いに対する肯定感を表現

している。

（宮田 勝）

多田節子さんのことば

昨年四月、介護中の夫の本誌への投句を

手伝った際、私もと軽い気持ちで初めて作

句し投句。三ヶ月毎に投句し一年が経った

時届いた特選の報に「間違いは？」と宮

田勝先生にお尋ねすると「仕事で校正をさ

れてこられた分、俳句の何たるかを自然に

身につけられたと思う」とのご返事。先生

のお言葉を信じ、余生に「俳句」も加え、

少しでも心豊かに過ごしたいです。

小林愛子第三句集「くれのおも」、私の選

んだ一句（小松川句会）

思ひぎり遺言呟捨てたる涼しさよ 蕪木静子

百合抱いて訪問のベル深く押す 齋藤孝夫

流れゆく球は急がず春の川 前川 昇

人影の消えてらんまんたる桜 長谷川はるみ

鯨食ふ蛇神様の社裏 大場八朗

咲き満ちて花野は色を失へり 柴田雅春

干梅を盗み食ひたる顔をなげし 宮崎正義

炎天下足場へスパナ投げ上げし 松井宣夫

焼香の指もて時けり花の種 小池清晴

寒月に別れの杯を満たし置く 丸本祥夫

しまとねりこ十一月の樹皮ごぼす 廣瀬俊雄

新玉の年の日を受くわが余白 江見悦子

（報・編集部）



9 3 9 0 3 6 4

射水市南太閤山13  
|  
24

万象作品投句係行

110円切手を  
貼ってください

氏名	住所

<通信欄>

## 編集後記

▽いささか旧聞にはなりますが、8月6日の平和祈念式典で石破首相がその挨拶の中に引用した歌人・正田篠枝の歌を記録に留めたいと思います。

太き骨は先生ならむそのそばに  
小さき頭の骨あつまれり

非戦の思いを深く心に刻みつきたいことばの力です。

(千久)

▽最近、井沢元彦氏の著書『言霊の日本史』を読んだ。日本人は日常的に忌み言葉避ける。その常識(?)の中にとっぷりと浸って何ら疑問を持たなかった私には、目から鱗の刺激となった。氏の著書を読み進めて、日本史への認識を正していきたい。(規子)

▽午前中、近くにある川へ散歩に出る。川幅12メートル、水深は1メートルくらいだが、四季折々の表情は豊かだ。今日は水が澄み、魚影も濃い。川岸には釣り人と白鷺、川には素人っぽいカッパルがカヌーをゆつくりと漕いでいる。転覆してもここなら大丈夫だろう。(清晴)

▽9月号「万象」より、校正のお手伝いをさせていただくこととなりました。初心者ですが、8月号に添付された「俳句作品の表記」に沿って、俳詠の作品を正しくお届けしたいと思っております。どうぞ宜しくお願いいたします。全国俳句大会でお会いできますことを楽しみにしております。

(久美子)

▽先日、鼻腔回復の手術を受けました。当日、裸になって手術台に乗ると医師の一人ひとり自己紹介してきました。私もただ挨拶するのでは愛想が無いと思って「よろしくお願います。生憎、名刺を切らしてまして」と言いました。俳句でいうおかし味ですね。

(宣夫)

▽この度、編集委員を仰せつかりました。ペテランの皆さんの足手まといにならないように学んでいきたいと思っております。

悩んでいると、まずはやってみよと故内海良太先生の声が聞こえて来るような気がします。

(みや子)

### 会員を募ります

会員は左記の会費(誌代)を前納していただきます。

一年分 一二、〇〇〇円

会費の納入は左記の振替をご利用ください。新会員は必ずその旨明記。郵便振替口座 00230・0・103581

万象俳句会

住所変更届・退会届等については、必ず封書又は葉書にて、左記へご連絡願います。

〒284-0015 四街道市千代田1-7-10 塗木翠雲

## 万象 十月号

第二十四巻 第七号

通巻 第二八三号

令和七年十月一日 発行

主宰 江見悦子  
発行人 江見悦子  
編集人 中村千久

〒168-0072

東京都杉並区高井戸東一-三-16 603

万象発行所

☎〇三六三二四一五七九六

# 令和7年度「万象」全国俳句大会・「万象」同人会総会 案内

開催日 令和6年10月27日(月)

午前11時(午前10時30分より受付開始)～午後4時終了予定

会場

ホテルグランドヒル市ヶ谷(東京都新宿区市谷本村町4-1) ☎03-33268101-17

【交通】JR中央線・総武線、都営地下鉄新宿線、東京メトロ有楽町線「市ヶ谷駅」より徒歩3分

※参加を申し込まれた方で、やむを得ず欠席される場合は、必ずご連絡ください。

連絡先 小池清晴 ☎03-3368115900

納入済みの会費は、全額を返金できない場合もありますので、ご了承ください。

※当日・前日の当ホテルでの宿泊の斡旋はいたしませんので、各自ご手配ください。

※新中央句会10月例会は、全国俳句大会前日になるため、休会とします。

※大会終了後、午後4時より、ホテル内別会場にて二次会(自由参加・約1時間)を予定しています。

全国の皆様にお目にかかれるのを楽しみにお待ちしております。

令和7年度「万象」全国俳句大会実行委員会

大会委員長 江見悦子

令和7年度「万象」同人会総会

実行委員長 中村千久  
実行委員長 中條睦子